

ふるさと 霞ヶ浦を中心とした周辺地域の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第130号 (2017年3月)

風に吹かれて (108)

白井啓治

・ 天空に雲雀の声すれど風のぬるまず

近しい人と言うと些か語弊があるが、このところ残念な人たちが次々とこの世にサヨナラを告げている。今日の新聞に、大森一樹氏が鈴木清順監督の追悼文を載せていた。オニリーワンで過激であれ、と締めくくっていたが、これは何も鈴木清順監督に対する言葉ではなく、表現者全員が思っている、願っている言葉である。

ジャンルを問わず表現者とは、現状を突き破るということだからオニリーワンであつたり過激であつたりするのは、自分自身が生きていることそのものだと言える。口の悪い映画界では、何に出会つても、何を見ても馬鹿野郎しか言わないようなところがある。馬鹿野郎を言っていないと唯一俺様、そして過激に、を保ってられないからである。馬鹿野郎こそ、総ての芸術表現者の宿命といふことができる。

オニリーワンで過激を突き進んできた先達者が次々とサヨナラしていく中であつて、私達の日常を見回してみると、実に不穏な風が流れている。三步進んで二歩下がる、という歌があるが、不穏な世の中を見ていると、どうも三步進んで四歩、

五歩下がるになっているのではないかと思つてしまふ。

幼稚園児に教育勅語を暗唱させる、というニュースを聞いて七十年進んで百五十年も下がつてしまふようなことを、如何に我欲を優先したとしても、尋常な者であつたら出来ることではない。だが尋常である筈の、尋常でなければならぬ筈の現職の大臣の口から「神武天皇の偉業に立ち戻り、日本のよき伝統を守りながら改革を進めるのが明治維新の精神だった。その精神を取り戻すべく、心を一つに頑張りたい」などの発言がなされた。

だが、神武天皇とは神話上の人物で、歴史上の人物ではない。天孫降臨を日本の歴史だと思つのは勝手であるが、それは歴史ではない。歴史学の定義から見ても歴史とは言わない。

いま古来から日本は、と言われている伝統文化という殆どのが、明治以降に作り上げられたものと言える。古代からの日本の文化として根付いてきた伝統、仕来たり、習慣、決まり事などというものではない。六曜の友引を「友を引く」などの物知り自慢の長屋のご隠居さんが、苦し紛れに解釈をつける落語のような中身では余りにも情けない。落語には、現状の批判と既成の打破を笑いに替えて批判するという文化に裏打ちされてあるもので、ご隠居さんの解釈をこれが歴史だと

捏造することはない。

若者たちの無気力感、短絡的刹那を嘆く分別者が多い。だが若者たちが無気力で短絡的なのだらうか。そうではないだろう。点取り虫の学習をさせられて、学問することを教えられてこなかった付けが回ってきただけではないだろうか。

何故学ぶ。それは学んだことをもって次への創造を工夫するためではないのか。改めて、年寄つて来た己を見直し、言葉することの必要性を重く感じる。

ふるさと風の会会員募集中!!

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

永遠の命

菅原茂美

『諸行無常』とか、『花の命は短くて…』とか、よく言われるので、この世に「永遠の命」などあるものか？ と、つついと思う。

確かに永遠の命は、憧れであり、夢であろう。

古来より権力者は、本気で不老長寿の薬探しなどしたが、そんなものは、この世にあるわけもない。

しかし、物の見方を変えれば、世界は反転する。永遠の命は、身辺に満ち溢れている。私自身にも、あなた自身にも、それは存在する。ただ気付かないだけの話。ではその「永遠の命」とは何か？

それは「生殖細胞」の事である。生殖細胞は、女性なら「卵巣」に、男性なら「精巣」に、生命誕生以来40億年間、ずーっと途切れることなく、生き続けている。個体の命は尽き果てても、生殖細胞はしつかりその「子孫」に継代されている。その継続こそ「永遠の命」である。生殖細胞を支える「体細胞」は、老化し、命耐えても、子孫に伝えた生殖細胞は、永遠の命を継続している。

*

【ならば、哺乳類の精巣は、なぜ危険な体腔外に飛び出したか。それほど大事なものでなら、しっかりと骨で囲み、内部に収納すべきなのに、神様の設計ミスというほかない。外部にブラ下っているのは危険極まりない。しかし体温より低い方が、減数分裂（精子造成）を促進する事は確か。野生のヤギの雄など、ライバルを倒し、多くの雌と励んだ後は高い山に登り、しみじみ「玉温？」を下げた後、また麓に戻り、お励みあそばすという。空冷エンジンなるが故と思われるが、ならば哺乳類よりも体温の高い（2℃ぐらい）鳥類の精巣は、なぜ体腔内

に、しつかり納められているのか？】

それゆえ、あなたも私も、いや現在生きている全ての生物に、子孫を残さなかった先祖は一個体もいなかったという事になる。我々の直系先祖に子供を残す事なく「天逝」した祖先は、一人もいなかったという事になる。

我々の先祖は、アフリカで野生生活時代、周囲は肉食獣の天敵だらけ。それを悉く生き抜いたのだから、今更ながら命の尊さをしみじみと思う。それゆえ、殺人や戦争は、どんな事があっても避けなければならぬ。40億年の連鎖の意味は、真に重いもの。そう考えれば、未成年者の自殺など本心に心が痛む。そんな未熟社会を営んでいるのは、現代の強欲で能無しの人達だ。

*

さて本論に入る前に、「人間はどこからきて、どこへ行くのか？」という疑問にいつもぶつかる。更にその前に、宇宙はどのようにして生まれ、地球の生命はどのようにして誕生したのか…？

宇宙座標に、このちっぽけな地球を俯瞰するほど難しい。しかし、この地球に「人類」という生物が生まれ、この広大な宇宙の一部を認識できるまでに進化できた事には、心から感心する。大型類人猿から枝分かれし、直立二足歩行を始めて僅か700万年で、あのサルの一種が宇宙の謎の一部を解明できるほどに進化するなど、全知全能の神様でさえ、予想できなかったであろう。

宇宙は138億年前、ビッグバンで始まった。時間も空間も物質もなく、全く「無」の一点が、突然大爆発を起こし、数億年かけて星が誕生。すると星が集まって「銀河」が1500億個も造られ、今なお、秒速1000kmという超高速で、宇宙は

膨張を続けている。そして宇宙は、暗黒物質、暗黒エネルギーで満ち、物質はわずか5%のみ。

宇宙の膨張はどこまで続くのか。或いは、どこかで拡大がストップし、ビッグクラッシュ（ビッグバンが起きた時と同じ高温・高密度で物質と時空が無次元の特異点に戻り、再びビッグバンに転じるのか。現段階では、全く予想もつかない。

さて各銀河には、恒星が平均2000億個存在する。わが「天の川銀河」は、直径10万光年の渦巻き銀河である。わが太陽は中心から2.5万光年離れたオリオン腕に、今から46億年前、誕生した。

太陽のルーツは、その辺にあった先代の恒星が老化爆死し、宇宙空間に飛散した燃えカスの星間物質が原材料である。それが再び集合して、太陽は生まれた。すると内部で水素やヘリウムが、「熱核融合」を起こし輝き出した。この辺の話は、

純物理現象ながら、仏教の輪廻転生を思わせる。

そして星間物質は、太陽から遠い所の軽い元素が集まって、まず「ガス惑星」である木星や土星など4個が誕生。その後、重い元素からなる星間物質が集まって地球など4個の「岩石惑星」が生まれた。太陽の子分である惑星は計8個である。地球は太陽から1.5億km（1天文単位）の位置に存在し、この位置は、水が3態（気体・液体・固体）をなす位置であり、生命誕生の好位置である。

地球上の生命誕生については諸説あるが、今からおよそ40億年前、海の底という説が一般的。宇宙からやってきたとする説も簡単には否定できないが、いずれにしても、最初の生命は海で誕生・発展した。光合成で吐き出した酸素がオゾン層をつくり、太陽からの紫外線を防ぐようになると、DNAが破壊されなくなるので、生物は陸上にも

進出できた。そのオゾン層が現在、人間の身近な便宜のために、破壊が進んでいる。

人類が生まれる進化の過程は、単細胞生物↓多細胞生物↓脊椎動物(魚類)↓両生類↓爬虫類↓哺乳類(2億年前)↓6500万年前の霊長類(サル目)誕生という道筋になる。

*

さて人体は、どのように構成されているのか？それはその生命の根源をなす生殖細胞と、260種類60兆個の「体細胞」で構成されている。260種類とは、皮膚や筋肉・骨・血球・神経などである。体細胞は、伝家の宝刀である生殖細胞を守り、育て、次世代に、無事、遺伝子を継代させるための「補助機関」である。手や足や脳ミソなどは、生殖細胞を安全に次世代へ送達するための運搬役。どんな美人だろうが、政治家だろうが、所詮は、単なる「運送屋」に過ぎない。

体細胞の大事な役目は、生殖細胞を成年に達するまで後生大事に守護し、減数分裂させて、新たな分身に生命の設計図である「DNA」を、安全で確実にバトンタッチさせる事である。即ち、60兆個の体細胞は、生殖細胞の単なる護衛兵であり、いわば使い捨ての、「奴隷」である。

【しかし人体は、60兆個の体細胞だけでは生きていけない。人体と共生する細菌など、特に腸管には600兆個のビフィズス菌や、乳酸菌などが共生し、その助けがなければ、食べた物の消化ができない。即ち微生物との共生により、人は生命を維持できるのだ。腸管だけではなく、耳孔、鼻腔、口腔、皮膚表面、膣などすべて共生菌という「先住民」がおればこそ、後から恐ろしい「ばい菌」が、そこに侵入してくる余地がなくなる。】

*

さて、永遠の命である生殖細胞を守護する体細胞からなる個体の寿命は、「種」により、ほぼ一定である。要するに「死」とは、生殖細胞を支持・育成する担当部門が、選交代する事である。

【その辺の事情をニホンミツバチで見ると、女王は毎日1500個の卵を産み、寿命は普通3年、最長8年。働きバチ(全雌)は冬季5か月、夏季3か月。雄は交尾の直後死亡。生き残った他の雄は巣から追い出され餓死。酷いのは、カマキリの雄。交尾が済めば、その雌に食われてしまう。】

要するに単細胞生物には、「死」というものはない。なぜならば、単細胞生物は全て生殖細胞であり、周りに栄養が豊かなら、一つの細胞は分裂して、2個の完璧な生殖細胞となるからである。

これの繰り返しが単細胞生物の世界。地球上の生物は、このような単細胞だけの時代を30億年続け、今から10億年前、やっと「多細胞生物」が誕生。

従って単細胞生物の「死」は事故死のみである。事故死とは、同僚に喰われたり、何かの強い酸やアルカリに接し、蕩(とう)ける事。太陽からの強い紫外線や放射線によりDNAが破壊される事など。その他、地球の歴史を顧みれば、海底火山の大噴火などにより、海水の強酸性化、酸欠、更には地球全体の凍結(マイナス40℃のスノーボール)や超温暖化などにより、全生物の90%前後が死滅した事件が何度もあった。しかし、生き残った単細胞には、恐るべき生命力があった。生物は環境激変の度ごとに、却って強力な進化を遂げ、新たな種に展開していった。

*

多細胞生物の出現は、およそ10億年前。1個の

単細胞生物が、何かの折に隣の仲間と手を組んで、持ちつ持たれつの生活を始めた。たとえ2個の細胞がくっついただけでも、生存に有利であったなら、その子孫を残す事になる。それまでの単細胞生物は、ほかの種類か、または同種の仲間を捉えて食べ、己の栄養としてきた。運が悪ければ、いつでもその逆もあり得た。

しかし、どんな悟りを開いたか知れないが、いろいろな環境事情もあって、同種の仲間とガツリ手を組んで、体を大きくし、生存のための作業を分担する方が、より効果的だと悟ったようだ。そのうち、2個同盟より、更に数を増やしていった方が確実に生存の可能性が高まる。

体を大きくした多細胞生物は、単なる寄せ集めの共同体ではなく、多機能を各部門が分担しあう完璧な1個体の新生物となる。肝心なのは子孫に遺伝子を伝える役目の「生殖細胞」を、誰かが分担し、他の機能は仲間に任せ、自分は威張って、仲間達を奴隷として使い、何事があっても生き抜く事。栄養摂取を本業とする細胞群。その栄養を全身に送達する役目の細胞群。移動(動物)又は固着(植物)して、栄養を摂取しやすくする細胞群。自分達の命を狙って来る敵と対抗する専守防衛と、攻撃専門の軍事担当部門。1個の多細胞生物が生きていくためには、現在の国家並みの組織固めが必要であつたろう。

ここで多細胞生物が単細胞時代と大きく異なる事は、生殖細胞以外の細胞は、使い捨ての、只々生殖細胞を守り育て、成長させ、新しい命を誕生させる手助けの役目に徹する事。それが終われば、お役御免。「死」のなかった生物に、「死亡」という新しい現象が生じた。

人類は知能が優れているから73億人という哺乳類最大のポピュレーションを誇る種に発達した：などは、とんでもない愚見。むしろ人類は食糧や居住地確保もままならぬ超愚かな動物だ。それ、移民だ、難民だと大騒ぎする狼狽ぶり。

狼など、食糧が少なければ、決してペーシング数を増やさず、産児制限をしつかり実行する。その点、逆に、人類は食糧があろうがなからうが、一瞬の快楽を求めて子作りに励み過ぎる。面倒見切れないほど子供を造る。全世界で毎年8500万人ずつ人口が増えている。

一方、炭疽（たんそ）菌は、あらゆる動物を一発で倒すほどの強者だが、棲む環境が悪化すると、細胞の中の遺伝子など重要なものを、「芽胞」という、いわば卵のようなものに全部移動させ、土の中で100年も平気で生きている。しかも100℃でも死なない。微生物の生き残り作戦は見上げたものだ。それに対し人類とは、真にか弱い生物である。その証拠に1918年のスペイン風邪*1というパンデミック（大流行）で、世界人口の5%が死亡した。

*1 スペイン風邪は風邪ではなく、A型インフルエンザである。病原体は鳥インフルエンザのH1N1ウイルス。アラスカの凍土が温暖化で溶けたので、埋葬されていた5遺体から本ウイルスが検出された。当時世界人口は20億人で、感染者は5億人。死者数は1億人とみられ、日本では人口5500万人中48万人が死亡した。鳥インフルエンザを決して甘く見てはいけない。人類は特別に優れた高等動物でも何でもない。こんな病原体に、一発で、大量殺戮される、か弱き動物である。

それゆえ、肌が白いとか、鼻が高いとか、脳ミ

ソが優れているとかは、言わばどうでもよい事。美人なるがゆえにあの男はダメ。こっちもダメ：などと選り好みをして、意図して子を産みもしない事の方が、遥かに重大な事。「夫」などあつてもなくてもかまわない。生活力があるなら、折角の遺伝子を多数この世に残してほしい。私流に言わせれば、人類の品種改良に貢献してほしい。但し、子供の教育だけは、しつかりやりなされ！

*

また、男が美人を求める深層心理は、きっとこの女性が生んだ子なら、母親同様、器量よしで、生涯、人に無視されるような事はなからう。子孫を残せない事はないはず：というDNAの意志に支配されているのだらう。女性も強い男を求めるのは、きっとこの人の子ならば、ヘコたれず立派に生き抜いて、確実に子孫を残してくれるに相違ない：というDNAの深慮遠謀なのであらう。

それゆえ、狩猟採集時代、沢山の獲物を持ち帰ってくれる強い男を、ライバルに横取りされてはかなわん：というわけで、排卵期でもない、いや妊娠中でさえも、その強い雄の性的要求を受け入れるというヒトにのみ見られる現象に発展していった。人類のセックス好きの遠因は、この辺にあるらしい。それが災いして今日の過剰人口に発展してしまつたと言われる。結局強い男は、多くの強い子供を残す。強い者が多くなれば、当然争いが絶えず、戦争ばかりやつている愚かな「人類」という種に発展していった。

*

【人類の祖先が、樹上生活から地上に降りた時、身長は80cmぐらいの4足歩行であつた。その後、前足の片方にエサや子を抱え、3足歩行となり、

遂に立ち上がって直立二足歩行に変わっていった。しかしそれでも足の親指は、他の4本の指と対向し、樹上生活時代の、足の指で木の枝をしつかり掴む名残は、化石に残っている。

そして直立二足歩行を始めたとはいえ、何しろ足は恐ろしく短い。肉食獣の絶好のエジキとなつた事は間違いない。すると立ち上がって、遠くを見渡せるようになると、足の長い者ほど、即ち背の高い者ほど、早く天敵を発見でき、素早く逃げることが出来る。即ち、仲間達より少しでも足の長い個体が生きて延びる確立を増した。その深層心理が70万年経った今でも、足の長い事にとらわれる心理が我々の心を支配している。美人コンテストなどがその心理を掻き立てる。そのような憧憬・実用的願望が積み重なってこれを性淘汰という現代人は、身長が1.8m伸びる事となつた。そして脳も3倍に増える事となつた。】

*

脱線が続いたが、人類は万物の霊長とか、うぬぼれて、あまりにも不適切な文明を発達させ、母なる地球を汚染し過ぎた。資源を枯渇させるまで贅沢の限りを尽くした。アイヌのような、神様から分けていただくという謙虚な心が失せてくると、資源の奪い合いになり、世界の平和は乱れる。

子孫を永続させたかったら、全人類は衣食住消費の10%を削減して、永遠の命が安全で確実に伝承されるよう心掛けたいものだ。奇しくもこの地球に誕生した生命。それを人類という暴れん坊が、目前の快楽のために、長い鎖の紐を、途中で断ち切ってはならない。21世紀の我々は、後世の子孫に嗤われないよう、襟を正して生きるべきだ。

地域に眠る埋もれた歴史（24） 木村 進

この「地域に眠る埋もれた歴史」シリーズも今回で24回目、2年となる。今まで「かすみがうら市出島地区」「真壁地区」「常州牛堀と横利根川」「潮来と延方」「水郷潮来」「玉里地区」と続けてきた。また途中で芭蕉の鹿島紀行、吉田松陰の銚子見物、消えた真鍋公園などの記事も挟んできた。丁度2年を迎えるので地元石岡をまとめておきたいと思う。ただ私がこの石岡に住んでまだ十年と日も浅く知らないことも多く、地元の方にとってはまことに拙い内容かもしれないがそこはご勘弁願いたい。

高浜地区（1）

1、高浜神社

石岡の市街より高浜街道を茨城廃寺跡や舟塚山古墳などの高台を霞ヶ浦へ下っていくと高浜の町へ出る。ここから右に石川や三村方面にまがるT字路、かどに古木に囲まれた高浜神社がある。周りには高浜の古くからある味噌・酒蔵などの趣のある旧家がある。この神社では旧暦6月21日に神事、青屋祭が行われている。石岡市総社近くにも青屋神社が有り毎年風習が受け継がれている。高浜の名前の由来は国府浜（うのはま）からきているとの説もあり、古代には国府（常陸府中・石岡）の外港として栄えた。昔、常陸国の国司は都から着任すると、当国内の大社に報告のため巡拝し、また奉幣祈願をするのがならわしとされていた。国司が常陸国一宮である鹿島神宮に参拝するのは、高浜から舟で行くのが通例で、荒天で出航不能のときは、高浜の浜にススキ・マコモ・ヨシな

どの青草で飯屋（青屋）をつくりそこから遙拝したといわれており、その飯屋が現在の高浜神社の始まりだと伝えられています。



石岡の昔ばなし 仲田安夫著 ふるさと文庫（1979年）によると、「石岡市内の青屋様が鹿島へ移るときは、中津川で高浜神社からかついできたみこしに石岡からきた青屋様を移して高浜神社にお移り願った。これらのことが恒例となつて、毎年6月21日（現在は7月25日）に「青馬の祭り」として続けられた。また高浜神社のカギ元は代々山口太郎左衛門氏が代々つとめたため、高浜で生まれた子供に太郎の名前をつけない慣わしとなった。大祭当日は、霞ヶ浦湖畔の真菰（まこも）を刈り、それを編んで敷物として拝殿前から神殿までの約250mの間に敷き、その上に祭礼者が並ぶのである。祭りが最高潮になると、山から刈り取ったたくさん（の薄（すすき）で直径2m程もある大きな輪をつくり、馬に乗った騎手がこの輪の中を駆け抜ける

のである。最後に祭りに参加した人々はこの薄を引き抜いて家に持ち帰り、家内安全・商売繁盛を祈願するのである。また、この日に薄の箸でうどんを食べる習慣が常陸国内で今も続いている。」と書かれている。

また、神社入り口の扁額は幕末に江戸無血開城の立役者として活躍した山岡鉄舟の書で、鉄舟の兄・小野古風は高浜小学校の初代校長であった。

高浜は常陸国風土記に次のように記載されている。「郡の西南を流れる志筑（しづく）の川は、筑波の山に水源を発し、郡内をめぐつて、東の高浜の海に注いでゐる。（略）この地は、花香る春に、また落葉散る秋に、乗り物を走らせ、舟を漕いで出かける。春には浦の花が千々に彩り、秋には岸の紅葉が百々に色づく。野辺に鶯は歌ひ、水辺に鶴は舞ふ。山里の男たちや海浜の娘たちが、次々に集まり、商人や農夫たちも舟を急がせて通ふ。夏には、朝夕に友を呼び、下僕を連れ、浜辺で海を眺めて過ごす。波を蹴立てて寄せる風に、暑さや気怠さを忘れ、岡の陰が長く伸びるころになると、涼しさもひとしほである。歌はれる歌は、

・高浜に来寄する浪の沖つ浪

寄すとも寄らじ 子らにし寄らば

（高浜に寄せ来る波が、どんなに沖から寄せ来ても（他の女が寄つて来ても）、私の心が動かないのは、あの娘に心を寄せているからだ。）

・高浜の下風（したかせ）さやぐ妹を恋ひ

妻と言はばや しこと召しつも

（高浜の浜辺の下を騒がしく吹く風ではないが、恋するあの娘を妻と呼びたい気持ちがかみあげてくる。こんな私だのに。）」

高浜が千三百年前からこのように常陸国国府

（神話の森 口訳 常陸風土記より）

〔府中〕の湊としてにぎわっていたことが書かれています。高浜と言う地名は全国にたくさんありますが、ここの地名の由来は「国府浜ⅡこうはまⅡ高浜」という説が強いようです。

2、爪書き阿弥陀（西光寺）

高浜の白菊酒造から小倉味噌（こがね味噌）店方面に進むと左側に小さなお堂が見えます。これが、親鸞上人の伝説の残る「爪書き阿弥陀堂」です。この阿弥陀堂は、元は平安時代の建立と伝えられています。現地には入口に小さな石柱が立っているだけで、案内板などは置かれていません。



堂の裏手に階段があり、上には墓地があるが、高浜の町と霞ヶ浦が一望できる絶景ポイントです。堂の中の石に阿弥陀様が薄らと浮き上がっています。また石に向かって左側には千手観音像があります。江戸時代（1817年5月）に小林一茶がこの高浜にも一泊したといわれています。その際この

西光寺に立ち寄っているようです。

親鸞上人の伝説は、次のようなものです。その昔、親鸞上人が鹿島参拝の途中、この阿弥陀堂の前にさしかかった時、この里に腫れ物でとても苦しんでいる男がいる事を聞いて、上人はいたく哀れに思い、「腫れ物の痛みを取り除いてあげよう」とその病人に語った。すると、その病人は、「お前の様な旅のこじき坊主に治せるものか」と取り合わなかった。しかし、上人は怒りもせず、病人の寝ている傍らに寄り、静かに念仏を唱え、病人の身体をさすっていると、不思議なことに痛みはひいて行った。さらに続けると、今度は腫れ物までひいてしまい、男は驚いて寢床から起き上がり、上人に心からお詫びを述べ、小麦の焼餅を勧めたという。やがて、上人が鹿島へ渡るため船着場へ行くと、見送りにきたその男は「お陰で体の痛みは直りました。どうぞ心の悩みや未来の苦しみも除いて下さい」と上人にお願ひした。すると上人は「極楽往生を願うなら、常に念仏を唱えることだ」と教えさとし、さらに「おまえの庭にある石には、阿弥陀如来が宿っているから、それを信心せよ」と言つて船に乗つてしまわれた。男が家に返つて石を見ると、そこには阿弥陀如来の尊像が浮彫のように現れていたもので、上人のありがたいお言葉を信じ、そこにお堂を建てて、朝に晩に念仏を唱え、名も常願坊と改めて、親鸞上人の弟子になつたという。（市制30周年記念 石岡の歴史より抜粋）

とその病人に語った。すると、その病人は、「お前の様な旅のこじき坊主に治せるものか」と取り合わなかった。しかし、上人は怒りもせず、病人の寝ている傍らに寄り、静かに念仏を唱え、病人の身体をさすっていると、不思議なことに痛みはひいて行った。さらに続けると、今度は腫れ物までひいてしまい、男は驚いて寢床から起き上がり、上人に心からお詫びを述べ、小麦の焼餅を勧めたという。やがて、上人が鹿島へ渡るため船着場へ行くと、見送りにきたその男は「お陰で体の痛みは直りました。どうぞ心の悩みや未来の苦しみも除いて下さい」と上人にお願ひした。すると上人は「極楽往生を願うなら、常に念仏を唱えることだ」と教えさとし、さらに「おまえの庭にある石には、阿弥陀如来が宿っているから、それを信心せよ」と言つて船に乗つてしまわれた。男が家に返つて石を見ると、そこには阿弥陀如来の尊像が浮彫のように現れていたもので、上人のありがたいお言葉を信じ、そこにお堂を建てて、朝に晩に念仏を唱え、名も常願坊と改めて、親鸞上人の弟子になつたという。（市制30周年記念 石岡の歴史より抜粋）

3、素十の愛した高浜

高浜に高野素十（すじゅう）の句碑があるというので探してみた。少しわかりにくいが高浜の町の通りを愛郷橋へ行く三叉路を過ぎて、左手の高台に登る階段が3つある。その最初が、爪書き阿弥陀堂、2番目が、金刀比羅神社（天杉神社）、3番目が高瀬寺観音堂である。素十の句碑はこの観音堂の高台に霞ヶ浦を見下ろすような位置に置かれ

ていた。



観音堂の裏手から見ると、高浜の町の先に霞ヶ浦が広がって見える。

高野素十は高浜虚子の一番弟子でした。藤代（北相馬郡山王村…現取手市神住町）の出身でしたが、ここ高浜を愛ししばしば訪れたといひます。そして、昭和27年に詠まれた歌が石碑に刻まれていました。

・湖の月の明るき村に住む

句碑が建てられたのは昭和50年11月で、翌年素十は83歳で亡くなりました。

石岡市内でも詠まれた歌があります。

・牡丹の一花まことに志

（参照 いしおかこの物語）

4、鬼沢大海の墓

素十の句碑のある観音堂の裏手の墓地に幕末の

国文学者「鬼沢大海（おにざわおおみ）」の墓がある。

石岡市の史跡に指定されている。鬼沢大海という人は1793年に高浜で生まれ、本居宣長の養子本居太平に学んだ石岡を代表する国文学者である。安政4年（1857）60歳で笠間藩に、文久3年（1863）には志筑藩に招かれて国学と和歌を講じている。

志筑藩から新撰組の参謀となり、後に内部対立で暗殺された伊藤甲子太郎と弟の鈴木三樹三郎兄弟がいるが、この鬼沢大海との関係は不明である。二人は志筑藩を脱藩しており、兄弟の姉妹は門下生に名前が残っているという。大海は笠間稻荷神社、常陸総社宮、佐志能神社の神官を務めている。一般の墓地の一番奥に大きな墓石が3つ建っており、その真中が大海の墓である。この墓碑は門弟たちにより栗田石を使って建てられたものだそうである。この栗田は志筑と石岡市染谷の間の風土記の丘にも近い「かすみがうら市栗田」であろうか。龍神山にも近いし、栗田の石塔などの史跡もあるから、そうなのかもしれない。

石岡を代表する画家に鬼澤小蘭と熊岡美彦がいるが、小蘭はこの鬼澤大海の息子の嫁であり、熊岡美彦はこの小蘭に絵を習っている。

（鈴木三樹三郎の塾）

鬼沢大海（おおみ）と志筑藩出身の伊藤・鈴木兄弟にどのように関係しているかを少し調べてみた。

特に伊藤甲子太郎と、鈴木三樹三郎のことは、興

味を持たれている方が多く、沢山の記事が出てくる。伊藤、鈴木兄弟の父鈴木専右衛門忠明は志筑藩の郷目付であったが、家老横手氏と対立し、謹慎謫居となり、その後脱藩してしまう。その後許されたというが、いろいろの理由があつて、藩を離れて、近くで塾を開いたと書かれている。

この塾の場所は、資料によると「高浜村」となっている資料が出てきましたが、正確には「高浜町」です。石岡市史下巻に次のように記載されている。「東大橋の三井寺では志筑藩士鈴木忠明が私塾を開き漢籍を教えた。忠明は専衛門とも称し志筑藩の郷目付であつた。ゆえあつて大橋に移り、寺をかりて私塾を開いた。小井戸にも支塾を設けたという。嘉永五年（1852）2月23日、48歳で没した。門弟有志は忠明の墓碑「嘉永五年実専明導居士」をたてた。墓はのちに石岡市の東耀寺に移された。忠明没後私塾は次男の三樹三郎にひきつがれた。長兄は新撰組参謀となつた伊藤甲子太郎である。三樹三郎は手習いを早々に切上げ戦いの真似ばかりしていたので父兄は次々に子弟を退塾させたため、ついに閉塾となつた。三樹三郎は兄のあとを追つて上京、新撰組九番隊長となつた。のち兄にしたがつて隊を脱け孝明天皇の御陵衛士となつた。兄甲子太郎が暗殺（油小路事件）されたため近藤勇を狙撃したが失敗した。

戊辰戦争に参加し赤報隊を結成、罪を得たが許されて明治政府に仕え、伊奈県小属・山形県警部・

酒田警察署長・福島県学務課長等を歴任した。

明治18年石岡市元真地に隠退、大正8年7月11日、83歳で没した。墓は東耀寺にある。」となっています。高浜町の町制の歴史を見てみると、

明治22年に「北根本村」「中津川村」「東大橋村」「東田中村」「小井戸村」「高浜村」の6村が合併して「高浜町」になりました。従って、塾は「大橋村(後に東大橋村)」にあり、支塾が「小井戸村」にあったと考えられます。これが高浜町となり、昭和28年に石岡市に編入されました。しかしこの合併についての記述も石岡市史にあります。それぞれの人数が少ないので一緒になったが、「高浜村・北根本村・中津川村」は人情風情も同じであったが、「東大橋村・小井戸村・東田中村」は徳川時代には旗本の地で少し違っていたとあります。また三井寺は当時すでに廃寺だったようです。

(続く)

ニッポン音楽の話

木下明男

今から50年前、労音と言う音楽運動に身を投じた頃のお話です。品川区の大企業に入社した頃、60年安保で団結力を身につけた労働者は、職場の隅々まで明るく諸要求を実現できる職場になっていました。諸々のサークル活動が盛んで、私も其の頃、先輩から誘われ労音の活動に...?

組合弱体化のため、新賃金制度(会社職制の強化)導入が計られ、組合の分裂策動が行われました。会社側の組合分裂策動によ

り、人間関係や様々な愛憎を経験した私は、社会のあり方に興味を持ち始めました。そんな折、サークルの代表として、労音の地域活動に参加するようになりました。北海道函館労音との交流会に参加したのもこの頃で、生涯をかけて音楽運動に参加するきっかけになりました。

そして、何のために音楽運動を進めるのかの勉強が始まりました！そんな時に学んだテキストから...

7 伝統音楽とヨーロッパ音楽

・資本主義音楽の始まり

明治維新で日本の社会が封建制から資本主義に進んだことは、音楽の面でも、やはり、鎖国を打ち破って、当時最も進んでいたヨーロッパの資本主義音楽を一度に国内に流れ込ませる結果になりました。藩政を止め、士・農・工・商の身分制度を止め、帯刀を止め、丁髷を切ったりと同じに、日本の封建音楽も初めて「文明開化」の方向に進みました。これは実に大きな事でした。日本人は、初めて、ヨーロッパの進んだ楽器理論にふれ、進んだ音楽の内容と形式に触れ、進んだ訓練法に触れました。全く新しい音楽の目を開かれたわけです。しかし、当時の日本の社会には、此の外国の音楽の進んだ要素を正しく受け入れる事、妨げる条件がありました。

・封建制のかす

封建制は、経済的には地代(年貢)による農民への搾取、政治的には大土地所有者である諸侯の専制主義、思想的には忠義・孝行・貞操などの封建道徳、これらを特色とするものです。ヨーロッパの場合は、フランス革命でも、イギリスの産業革

命でも、資本主義勢力が封建権力を打倒すと同時に、それらの封建的要素を社会から一掃して、主権を人民の手に移し、民主主義(ブルジョア民主主義)を確立する事を中心の目標としました。ところが、日本の場合、そう行きませんでした。鎖国で資本主義的要素の発展が極めて不自然に妨ぎ止められていたので、資本主義勢力が封建権力を打倒して権力を握ったのでなく、下級武士を重要な革命勢力として、月足らずの資本主義勢力が、封建権力との妥協によって、権力を握りました。それで、封建的要素が非常に多く社会の基礎に残りました。封建制の経済的基礎である、大土地所有者の地代による農民への圧迫は、形を変えて、殆んどそのまま残りました。武士階級の専制主義は、絶対主義的天皇制という、一層野蛮な形を取るようになりました。家父長制を基礎とする封建道徳も、殆んどそのまま受け継がれました。日本人民は野蛮な封建制を心から憎んで、これを打倒した経験を持っていません。今でも、各地方の県庁所在地、その他の小都市には、多く城跡の公園に、元の領主を祭った神社があります。花見時には、その前で宴会をやり、何百年もの長い間、私たちの祖先に残酷な圧迫を加えた領主を、何故神に祭るのでしょうか?こういう封建制のかすは、天皇制の持つ極端な、国粹主義(復古主義)の基礎となったものです。

・音楽の奇妙な世襲制度

徳川幕府の建設当時、崇伝(スウデン 1569~1633)という臨済宗の禅僧がいました。「黒衣の宰相」と呼ばれ、幕府の政治顧問として、たくさんの「法度」を作りました。日本封建制の代表的な特徴で

ある、宗教家や信徒や芸術家の世襲制度は、こうして、生まれました。本来、世襲ではありえない、世襲であつてはならない、思想や芸術の正しい発展を、この世襲制度がどんなに縛り上げて来たか？そういう古い封建制の代表的な形である家元制度が、資本主義も末期になっている、今の日本の社会に、まだ続いています。歌舞伎その他の芸能の世界に、「襲名披露」が今も盛んに行われています。考えてみれば、何と奇妙な事か？さながらに、「国粹主義」（復古主義）の見本で、同時に封建的な古臭いものが、日本の社会にどんなに根を据っているか、良く解ります。

・盲目的なヨーロッパ崇拜

一方、それと全く反対の、極端な外国崇拜が氣違いじみた形で現れました。もともと、ヨーロッパと比べて、非常に立ち遅れて出発した、日本資本主義は、当然のこととして、ヨーロッパ資本主義に追いつくための、極端な焦りを持つていました。日本の伝統音楽などは、全て、何の価値もないもので、これを一掃して、外国の高い音楽を入れなければ、日本音楽は発展しないと考えるような、盲目的なヨーロッパ崇拜は、此処から生まれました。

伊沢修二 (Ishizu Shuji) という人がいた。東京・上野に国立の東京音楽学校（今の東京芸術大学の前身）ができたときに、その最初の校長になった人です。明治政府は、伊沢修二の調査・上申に基づいて、日本の伝統音楽は、全て、学校で教える価値を持たないものと認め、ドイツ音楽を中心とするヨーロッパ音楽だけを教える方針をたてました。それは、今度の終戦の少し前まで、続きました。

何処の国の音楽の歴史を見ても、その国の伝統的な音楽を柱にして、それに外国の優れた音楽の影響を受け、それで、初めて正しい発展を遂げるほどの、極端な外国崇拜でした。だから、外国の音楽はよくできるが、自分の国の音楽は全くできない、不思議な音楽家がいくらでもいるという、奇妙な現象が生まれました。

・国粹主義と外国崇拜の反動的な統一

もともと、絶対主義的天皇制は、封建制度と資本主義制度と、この二つの最も矛盾した要素を統一したものです。だから、絶対主義です。その底に、封建的な国粹主義と資本主義的な外国崇拜、この二つの、やはり、最も矛盾した要素を不自然に統一した部分を持つていたのは、当然の事です。それはあくまで不自然な統一でした。全ての文化がそうであつたように、音楽も、また、その不自然な統一を反映しました。そこで伝統的な音楽と外国音楽とは、十分溶け合う事は出来ず、伝統音楽が外国音楽の影響を受けて正しく発展するという訳にはいきませんでした。日本画と洋画、能楽や歌舞伎と新劇、それらの関係と全く同じに、伝統音楽と洋楽も、いつまでも、不自然に対立したまま残されました。そうして、日本音楽は、全国的生活や感情を反映する、真の民族的な音楽に成長する事が出来ず、当時の侵略的な軍国主義の指導の下に、伝統音楽も、洋楽も、共に極めて反動的な役割まで果たした。伝統的な音楽の浪花節、洋楽系統の軍歌は、その代表的なものです。どちらも日本帝国主義のアジア侵略のために、最も積極的な役割をした。先に挙げた伊沢修二は、文部

省編集局長として、あの反動的な明治時代の「国定小学読本」の編集の責任者でしたし、台湾占領のための教育制度と国語教育の根本方針を立てた人です。また、あの極反動の「紀元節の歌」や「元長節の歌」の作曲者でした。

明治維新を通じて、日本音楽が封建音楽から資本主義音楽へ進む道を開かれたことは、当然、日本音楽の正しい発展のために、非常に有利な条件が生まれた事です。しかし、野蛮な封建制の古臭い粕が日本の社会に深く残っていたために、其の有利な条件が十分その役割を果たす事が出来なかった。そして、直接そういう害を日本の音楽に与えたものは、絶対主義的天皇制と言う、最も反動的な政治の指導でした。その害毒は、今も、邦楽の世界にも、洋楽の世界にも、相当深く根を残しています。

・労働者階級の指導による新しい音楽運動の発生
本来、近代民族は、資本主義の発達を基礎に、資本主義階級の指導で、結成されるものです。従って、全ての民族文化も、その一つである民族音楽も、資本主義社会で資本家階級の指導で完成に向かうのが原則です。そして、其々の音楽が民族音楽として結成されると言うことは、世界のすべての音楽が、その本質的発展のために、必ず通らなければならない段階です。ところが、日本の資本家階級は、日本民族そのものを真の近代民族として結成できなかったように、日本音楽をも、また、真の民族音楽として発展させる事が出来ず、逆にそれを妨げました。そこで、日本音楽を真に近代的な民族音楽として発展させるといふ、音楽上の中心の任務は、当然、次の社会の担い手であ

る革命的な労働者階級の肩にかかってきました。

1924年(大正10年)頃を中心として、日本に初めて、労働者階級の指導する文化運動が起こって、「日本・プロレタリア文化連盟」が生まれました。その頃、労働者階級を先頭に、野蛮な天皇制に反対し軍国主義の侵略戦争に反対する、日本の民主主義運動の大きな発展がありました。それを基礎に、この革命的な文学運動が起こったもので、文学の方面で小林多喜二や徳永直などの作品が現れたのもこの時です。労働者階級の指導するこの文化運動のなかに、当然、革命的な音楽運動も含まれていて、小野宮吉、関鑑子、鹿地亘などの人々がこれに参加しました。これが労働者階級の指導する日本最初の音楽運動で、今も広く歌われている、「赤旗の歌」(民衆の旗、赤旗は…)や「メーデー歌」(聞け、万国の労働者…)は、この運動の中から生まれたものです。また、「インターナショナルの歌」(起て、飢えたる者よ…)「青年同盟の歌」(同志よ、固く結ぶ…)その他の外国の革命歌も、此の頃から、翻訳されて、広く歌われるようになりました。しかし、これらの歌を歌っただけで直ぐ投獄されるような、当時の酷い弾圧のもとで、これらの民主的な音楽運動は、とてもまともな発展を遂げられなかった。しかし、今労働者階級の指導する音楽運動が、このように大きく発展しつつある、此の源流は遙かに、此処にありました。

自了(城間清豊)

小林幸枝

琉球王国の本を読んでいて、首里王府時代の絵

師、自了(城間清豊(ぐすくませいほう))のことを知りました。城間清豊は、1614年、首里士族の長男として生まれましたが、先天的聾啞の障害を負っていました。自了は、独学で画技を習得したと言われています。

自了の父は、優れた芸能家で、楽士たちを統括する「音楽主取」として江戸に派遣され、三代將軍家光の前で舞楽を披露するという大役も果たした人でした。しかし、清豊の耳が聞こえないことが分かると、哀れと思いながらも教育することを諦め、弟の清安に教えを注いだのでした。

そうした環境にありながら清豊は、好奇心旺盛な子供だったと言ひ、こんな逸話も残されています。

—清豊八歳のこと。太陽を指して身振りて父に何か訊ねましたが、父は真剣に取り合ってくれませんでした。そこで清豊は山に登り、朝夕太陽を観察し始めたそうです。一ヶ月ほど経った頃、清豊は、突然何かに納得したように手を叩いて笑い出しました。清豊はこの時、太陽をめぐる地球の動きを理解した、といひます。—

自了の作品は、大変価値あるものとして、戦前までは士族の家に複製残されていたそうですが、現在清豊の作品と確認できるものは「白澤之図」一点です。それ以外には数点が彼の作品ではないかと伝えられているもののみです。

清豊は、三十歳の若さで世を去りましたが、大きな障害を持ちながら短い人生に豊かな才能を開花させ、琉球内外で称賛される多くの名画を残したことは人々の語り草となり、多くの伝承が残されました。

自了の死後四十四年後に、中国福州の学者、陳

元輔(ちんげんぽ)という人が、琉球に伝わる自了の逸話をまとめて「中山自了伝」を書き残しています。また子孫に継承されている家譜にも自了のことが記されており、この二つの文献が、今日、彼の生涯を伝えています。

首里城公園と海洋博覧会記念公園管理財団に、自了の作品が展示されているそうです。

父島の影

伊東弓子

五月十五日(日)午後二時、母島と別れる時が来た。ここを離れたくない思いでいっぱいだった。自然巡り、戦跡巡りの案内してくれた人達が、名物おじさんの太鼓の響きと一緒に見送ってくれた。小学生は、先生とのお別れでもあろうか、歌を唄い言葉をかけている。「ははじま丸」出航、弟の読経が始まり、折鶴が、花びらが波間に舞っていく。

「七十余年ぶりにお会いしに来ました。父の気持をお伝えします。どうか安らかに眠りください」とお線香も届けた。

だんだん遠くなっていく。右の海の波は丸く光って崩れていった。また来たい。無理かなと後ろ髪をひかれる母島。空や海の広さの中で実にちっぽけな島、浮いているのか、島の根っこは海底に着いているのだろうか。三日前に行った北港はつきり見える漁船が出入りし、かつお節つくりで儲かった小さな村。大人も子供も踏み固めた部落の一本道。十九年の強制疎開で六百人は、何処へ行ってしまったのだろう。浜の東屋で人が手を振

つてくれているようだ。父かもしれないと必死で手を振ったがそんな筈はないだろう。

四時十分父島に着いた。大きな二見湾に入ると、右に扇浦、境浦そして製氷海岸。左に大根崎、大村海岸その間を行くと奥に漁港があり、二見港に着いた。湾の奥に沈没船が横たわっている。サイパンに行く途中のひんこう丸が十九年の六月、七月に座礁して、年月と共に少しずつ湾内に引き寄せられてきたが、ペルー地震の時、ぐうつと奥に引き寄せられたとか。湾に抱かれているようだ。海岸から高台の間は平坦な大村地区、規模も大きく民宿、官公庁、商店街、飲食店街と近代的な建物が多い。

浜辺の案内は若い人が多く、陸地の案内は中年者が多いようだ。母島と同様、小笠原の島に遊びに来たのが切っ掛けで住み着いた人が多いようだ。洗濯場には潜水服が沢山干してある。私は妹と下で、中二階に弟という部屋で広々とし、窓から月も見えた。

十六日(月) 島巡りに出かける。山肌には枕状溶岩があちこちに見られる。海亀は自然の孵化が多いが人工孵化もあるようだ。鯨もこの海の周辺には多いようで、季節によつて見ることも出来るようだ。じんばいひるがお、つりはまてんぼう、むらさきはながそう等、歩きながら聞いたが頭に残っていないのが残念だ。「ムニン」という名のつくものが多かった。江戸時代の調査団がつけた島の名(1830年、辰の無人島)が英語でポニンというなどからくるのかの説明だった。アカボコたこづる、ムニンしらごけも、メモに記されている。東島の方では、あかがしらからす等が絶滅寸前数十羽しかいないとか。父島周辺には兄島、

賀島、嫁島、媒島、姪島、弟島など、母島の周りにも姉島、妹島、姪島があった。遠く故郷を離れてきた人達が、家族を思い名付けたとも聞いた。学校の旅行の話もでた。五年生は島の中を歩き、六年生になると母島へ行くようになる。中学生は京都、奈良へ旅をし、高校生は北海道へ行つて、船の出を待つて、デイズニールランドへ寄るそうだ。今日は北寄りの風で涼しく爽やかだった。南風だと蒸し暑くて酷いそうだ。

五月十七日(火)は戦跡めぐりだった。案内してくれる板長さんは、見るからに一筋通った人だった。父島から硫黄島へ何度も兵隊は出て行つたが、帰ってくる船はなかった。人口一九〇〇人、海軍七〇〇〇人、陸軍一万八、軍属三四〇〇人いたという話から始まった。板長さんは、昭和四十九年三月に第一歩き出しを始めたという。

島を訊ねてきた家族、当時の兵隊さんからの聞き書きを元に学習し纏められたそうだ。道順も考えて現在使用しているという。案内のひとつと言に当時の一人一人の姿が浮かび、戦いに備えている声が聞こえてくるようだ。蛇、蚊、虻もいなかったそうだ。椰子の森に覆われ、上空からは見えないが高低差の多い中での作業は想像を絶するものだったそうだ。

野戦病院造り、穴掘り、トンネル造り、大砲を運ぶ道、水路堀、隧道づくり、通信基地、恒河沙砲台、威嚇射撃をする場所づくり等、並大抵ではない仕事には、全国から大工の棟梁、工夫、石工、囚人、土方の荒くれ男を集め、いそがせて出来たそうだ。鶯の声が森を渡っていく。からす鳩、うしがえるの鳴き声を真似て笑わしてくれるユーモアのある板長さん。小田原から来た九十九歳の人

がいろいろ話してくれたという。

便所は四人で使うようになっていた。炊事場の汚れ水で便所は洗った。海軍は様式便所だった。炊事用の水はドラム缶に溜めた雨水だった。木の葉に埋まって寝たり、トンネル内で体を寄せ合つて寝たという。

硫黄島陥落の時は、カンパン一袋で四日間、二十四時間体制で穴に潜んでいたそうだ。そしてあちこちに茶碗、ビール瓶、やかん等まとめてあつた。

兵隊たちの姿が忍ばれる。私も急斜面の上がり下り、まだ体力のあることに自信を持つ機会になった。いつの日にかは七十年前の道が木の葉に埋まり、器が欠け、穴が埋まっていき、車体が錆び、伝える言葉がなくなっていくのだろうか。

十八日(金)は、レンタカーで好きな所、まだ逝かない所へ行く予定だった。母島は細長い島、父島は大きく丸みをおびている。遠い距離も近く感じる島の南側に行くことにした。

扇浦の道路からもあの沈没船の傾く姿が見える。何処からでも見てほしいのか、昨日の話によると父島にも寺がある。が、いんちき坊主がいるとのこと、寄つてみたい気もするが余計な蓋を開けることもないかと思ひ、口にも出さなかった。

南端の小湊海岸の方向へ向かった。小高い山が続く、その下をたつぷり水を湛えて流れている八ッ瀬川、今、草木を山を写している。あの日この島の様子も写したことだろうが、流れ去って消えてしまった。父島は人の増える条件があるようで俗化していくのが早いのではないかと心配だ。自分達の楽しみや物見遊山だけで荒らしてほしくない思ひだ。

結構広い町を行ったり来たりして土産を見て歩いた。夕食後、過ぎた十日間が早く思えて、三人ともなにか物足りない気持ちで喋っていた。人間って欲深いものだともあらためて思う。

十九日(土)は、午後二時二見港をおがさわら丸で出港。船も大きく、乗客の数も多い。いよいよお別れだ。母島を去る時のつらさとは違う。

「行つてらっしゃい。また来てください」

「行つてらっしゃい。帰ってきてね」

さよならは、言わないそうだ。各民宿の船がおがさわら丸と並ぶかのように寄ってきた。それから船上にいた若い男女が次々に海に飛び込んだ。波間から手を振って、

「行つてらっしゃい。また来てください」

「行つてらっしゃい。帰ってきてね」

十艘の船からの挨拶は、あつという間の出来事だった。その感動はいつまでも心に残ることだろう。最後に海上保安庁の船が暫くの間ついてきてくれた。水上に大きな白い道を描きながら戻っていった。私達も故郷に戻ることになる。

あの空の青さも、海の青さも語ることはないが、美しい色の中に討えているようだ。本当に守っていけますか、平和を。

父が召集令状を手にしたのは、昭和十九年三月だった。私は四歳半、妹は二歳九ヶ月、弟はあと三ヶ月で産まれるという時だった。私は縁側にいた。父は観音堂の方から「赤紙」を振って走ってきた。家族も皆、庭に出てきた。

父は三十四歳、祖母は七十歳、伯母は四十三歳、番頭さんは六十二歳。死を覚悟していたであろう父は、男手のない家族、年寄りと子供の生活をどんな思いで母に託したのだろう。父は産まれてく

る子供のことを母に頼んだという。「産まれてくる子が女の子だったらお前の好きな名をつけてくれ。男の子だったら俺の名の半分をつけて欲しい」と。産まれた子は男の子。父の名前を半分つけた。「成」という字をつけた。それが弟だ。弟よ。今回、母島に連れてきてくれてありがとうね。

いしおかの雛まつり

兼平智恵子

本当のふるさとに帰ることが叶わなくともここにすれば『ただいま』と言える

あたたかなまち石岡。

おかえりなさい……いしおか

(いしおか雛巡りパンフレットより)

今年のいしおかの雛まつりは石岡駅より中心市街地商店街を中心に行われた「第十一回 いしおか雛巡り」(二月十八日～三月三日)、石岡駅より車で西へ約二十分、中央公民館で行われた「柿岡の雛まつり」(二月十五日～三月三日)、石岡駅より東へ車で約七分、南台コミュニティセンターでの雛人形(二月十五日～三月三日)、と各地でそれぞれに、ちよっとおすましの雛さま、気品ある明治、大正時代の雛さま、そして丹精込めた手作りの雛飾りと盛り沢山のイベント。健やかに心やさしく、心強く成長するようにと、思いが込められていました。

今回はじめて登場しました石岡駅前の文化伝承館には、千体余りの雛さま達が勢揃い。「おかえりなさい いしおか……」と恋瀬姫が描かれた、大きな垂れ幕と共に豪華絢爛。圧巻の一言です。こ

の雛さま達は石岡市内、県内外の方々からの寄贈されたものだそう。雛壇は三・六m×三・六mの十段、高さ三mに飾られていました。

寄贈なされた方が見に来られ、どれが自分のものか分からなかったそうです。商工会議所婦人部、そして石岡市観光課の皆さん、大変さが目に浮かびます。お疲れ様でございました。

観光施設「まち蔵 藍」では各年代の段飾りが数十台、その中で静岡の天神雛に注目でした。説明文によりますと、静岡の中部では、桃の節句に男の子の節句品として衣装をきた天神様が飾られます。五～六月の農家ではお茶の摘み取り、田植えの支度等があり多忙の極みに達する為、男の子と女の子の節句を同時に行ってしまうという知恵が生まれました、とのこと。

天神さまと右大臣、左大臣の三体での段飾り、力強く、入口で迎えてくれたのでした。

航海守護や開運の神として信仰されている金刀比羅神社には舟に乗った雛さまたち、今回は、紀貫之、陽成院、紫式部など十一首の和歌と共に、まさに奈良、平安の世にタイムスリップです。

毎回楽しみ恒例のまちかど情報センターの歴史絵巻情景飾りはご存知「浦島太郎物語」。あけてはならぬと乙姫さまから手渡された玉手箱を開けてしまい白髪頭のおじいさんになった太郎のその後のお話しを演じています。

太郎は実は白髪のお鶴と化し、大空に舞い上がって行く。自由に空を舞う鶴を待ちわびていたのは、ほかでもない亀の姿になった海の女神乙姫さまでした。

万年の命を持つ海の女神(亀)が人間の男、太郎に恋をした。万年を旅する亀は、千年を生きる鶴の

命を男に与え晴れて夫婦になる情景、お見事です。

浦島太郎の物語の元になった物語は古くは古事記や日本書紀、風土記に描かれている。風土記に描かれた島浦子伝説を、万葉集では、高橋虫麻呂がまとめたと言われている。虫麻呂は奈良時代初期の歌人で、七十九年（養老三）年、藤原宇合が常陸守であった頃に宇合の下僚になっている。常陸国に、とてもゆかりのある虫麻呂が浦島太郎のお話しが後世に伝えられていく下地を作っていたと言いうのも不思議な因縁といえるでしょう。

光り輝く竹の節、機織りの部屋、鬼ヶ島等けしでのぞき見してはいけないといいながら、昔話しは、未来と現世の扉はつながっていると教えてくれる。と結んでいる。（まちど情報センター歴史絵巻情景飾りのパンフレットより抜粋）

その他の情景として、千尋の底へと安徳天皇と平時子の入水、時の人トランプ氏から、茨城の知名度を一気に上昇させたであろう稀勢の里の登場など工夫した含蓄のある情景飾りに今年も大拍手でした。また、（いしおかまちなか散歩企画第三回）石岡スイーツと古都物語、（石岡史跡巡り）ルネツ散歩、歴史の里に相応しい行事が満載でした。

各町内で行われたふるまい、写真展、美術展、ステーションパークでの「ひな祭りだよ！全員集合」笑顔はじめて幼稚園生女の子の愛くるしいキツツダンス、魅力的な中学生のダンス、思わず速いテンポにあわせて見入ってしまいました。

・もう一度健やかであれ

心優しくあれ心強くあれ

智恵子

※先月のふるさと風二一九号の文中に間違いがありました。

（正）正懐親王（誤）正懐天皇、訂正の程宜しくお願い致します。

【風の談話室】

《特別寄稿》

①

落ち穂拾い（5）

鈴木 健

一 阿武・阿波

apa【火】アバ、アブ、アブル、アブラ、アブナイ、アベ。中国地方の数少ない活火山のひとつに阿武火山群がある。この火山群は山口県萩市と、その北東方に分布する40余りの火山帯からできている。それは、200万～150万年前の活動でつくられた。最新の噴火は8800年前および3000年の縄文時代に籠山で起きた。apa【火】はこの時代につけられた縄文語で、のちにアイヌ語にひきつがれ、日本語ではアブとなり阿武という感じがあてられたと考える。その籠山には直径30mの火口があり、アブはそこから吹きあがった火のことであった。それ以外にココの阿武の語源があるだろうか。アバは愛媛県周桑郡で火だこ。肉をアブ（火）でアブるとアブラapa【火】ra【粘液】がしたたる。山口県出身のアベ総理、アブナイ火あそびはアブナイですぞ。

一方、大阪府高槻市には阿武山古墳がある。火山ではないこちらのアブは烽火（のろし）を上げたところか、火入れ、焼畑をしたところか。語源のわからないそのノロシもアイヌ語ではnure【報せる】us【するのがならいである】i【もの・こと】。紀元は縄文時代に遡るか、それとも、古墳時代以降の縄文の後裔による発想か。

アイヌ語にapa【入口】もある。徳島県の旧国名が阿波、古事記には粟の国とあることからすれば、

アイヌ以前の縄文語に遡る。黒潮に乗って北上した人たちが、穏やかな紀伊水道に入り、上陸したところがapa→aha阿波・粟・淡路島、千葉県南部の安房郡・旧安房の国、茨城県南端の稲敷市に阿波・阿波崎・阿婆の島（常陸国風土記）、北辺の那珂川（同粟河）畔に粟・阿波（和名抄）栗山。阿波山は後にa→o、大山。大津港も梁津（和名抄梁津（アワツの誤字）の郷につくられ、滋賀県大津市には粟津貝塚がある。

二 五十里（イカリ）・斑鳩（イカルガ）・五十嵐

iksu【またぐ、越える、溢れる】|| i【それ】kasu【の上を越す】の転という。イカ（古語・津軽・秋田・静岡・鳥取東伯あふれる。沖縄草木が生い茂る）促音化、イッカル（福島東白川・関東・長野 またぐ）、イカリ（青森・鳥取 増水・洪水 古語水面が盛り上がる、あふれ出る）、肩をイカラス（盛り上げる）、イカまる（静岡田方 あふれる）怒ル、怒り狂う。

ika【溢れる】-ru【道】。ika【溢れる】-ru【高】ある【i】所。五十里（栃木）。1683年日光地震後、葛老山（1124m）が崩落、男鹿川と湯西川の合流点を埋め、湖が誕生。大溢水を語源とする五十里（イカリ）地名はこのころ誕生か。1723年の大雨でそれが崩れ落ち大洪水。1956年に同じ場所にダムを造成し五十里湖と命名。

ika【溢れる】-ru【道】-ka【の上、ほとり、岸】。

斑鳩（奈良 北は矢田丘陵、東に富尾川、南に大和川（旧竜田川）、西は竜田川（旧平群川）。法隆寺はこの地の四神相応地形の場所に建てられたという。奈良盆地の周辺の山から流れ出た水はこの付近すべて大和川に合流して大阪湾にそそいでいる。合流低地の河合町川合に水をつかさどる式内社広瀬神社。古代のそこ

はまぎれもなくイカル（溢水路、北側の河岸台地はイカル・カ（ほとり、岸、上）であろう。兵庫県揖保郡太子町の大字に鰯（イカルガ。揖保川支流の林田川と大津茂川間に位置する。ココも水害常襲地だったか。明治・昭和間に斑鳩村、斑鳩町。

ika【溢れる】-ka【岸】。大阪府枚方市伊加賀。

東部は枚方丘陵、西部は淀川に接した低地。明治18年淀川大洪水、俗に「伊加賀切れ」といわれる堤防決壊で、大阪市中大被害。

ika【超える】-ta【そのところ】。愛媛禁伊方町。佐田岬基部北岸、原発立地。南岸へ越す峠の手前に大字伊方越。

ika【溢れる】-ru【（水の）道】usi【（名詞）がそこにいつもある所】。新潟県三条市で信濃川に合流する五十嵐川は、たびたび流路を変える「暴れ川」であった。

一方、イガラシにはinkar【物見をし】-usi【（動詞）つけているところ】との解釈もある。それは魚群監視台のあるところで、新潟市西区五十嵐の五十嵐浜は「五十嵐の干鰯（ホシカ）」といわれる鰯漁の本場、そこはこのインカルウシにふさわしい地名である。このイガラシは南下したアイヌの置き土産か縄文語由来か。

なお、ika【溢れる】からつくられたアイヌ語にikassina【余り】がある。30をアイヌ語でwaape【10】-ikassina【余り】-hot【20】と呼ぶ。そのhotは日本語になって十重二十重や二十歳の20（ハタ）あるいは手足の指の総数＝当時の数えられる数の限度＝果てとなったか。

古隅田川はJR常磐線の亀有駅の北東で南から西に向きを変え、蛇行を繰り返しながら現荒川放水路方面に流れ、その川跡が今、足立区と葛飾区

の境界になっている。その亀有駅の北方一帯に東西南北を冠した碇地名が名をとどめている。近くには堤・垵・河原等水害に苦しんだことを示す地名があり、戦後もカサリン台風時に決壊している。そのイカリも五十里と同じ語源、ika【溢れる】-ru【高くある】-i【ところ】、大湊水箇所であろう。

では、船を繋ぎ止めるための碇の語源はなにか。海石（イクリ）（古事記 暗礁）、沈石（イカリ）（播磨國風土記 暗礁）、i【そのの】kiri【かげ】暗礁であったろう。「碇 伊加里 海中以石駐舟」（和名抄）。古代の錨は石であった。古事記にあるにはそれはアイヌ語ではなく、縄文時代人あるいはその血を受け継いだ人の言葉であったろう。辺野古の米軍キャンプシユワブ内での中世の「碇石」が出土している。

②（新連載1）

火の海の中で

田島早苗

早紀は岐阜駅の南に広がる田園地帯の小さな集落で育った。何時も、きれいな小川で魚捕りをする二歳年上の兄健作のバケツ持ち「兄ちゃん、ほらそこ！」敏捷に魚を捉える兄が自慢のオチビさんだった。

昭和十五年、張り切って小学校に入学した早紀は、同級生に朝鮮の子が二人いて皆から疎外されている事が気になり、思い切って声を掛け、家にも遊びに行く様になっていった。居留地区という言葉を知ったのもその頃で、恐る恐る踏み入れたその場所は、決して豊かではない早紀の家から見ても想像の他で、胸が詰まり言葉を失っていた。

でも覗き見した結婚式、花嫁さんの美しさは何時までも脳裏に焼き付いて離れなかった。

昭和十六年十二月に始まった戦争が、平和だった集落にも不気味な陰を落とし始め、間もなく居留地の友達は学校へ来なくなり、居留区のあたりに大きな工場が出来た。

その頃から、泳ぐ魚が見えるほど澄んでいた小川が白く濁り、兄も魚を捕るために別の場所を探す様になっていた。

末の妹明子が生まれた昭和十七年十月頃には、出征する若者の壮行会が頻りに行われるようになり「欲シガリマセン勝ツマデハ」の合言葉と共に食料や衣類が配給制になり、特に食べ物の不足は深刻だった。産後の肥立ちが悪く、母乳の出ない母加代に少しばかりのミルクと砂糖が特別支給されたが、それだけでは足りず、重湯を作って明子に飲ませるのが早紀の重要な役目になった。何時も腹を空かせていた子供達は、兄がこっそり砂糖を舐めているのを見つけると、早紀と二歳下の妹和子も我慢できず手を出してしまった。

母に代わって明子のおむつを川へ洗濯にゆくのも早紀の仕事で、霜焼けが崩れて血の滲む手を同級生に見られないようにするのが一苦労だったけれど「母を助けている」と言う自負心だけに支えられて頑張っていた。でも、赤ちゃんの砂糖を盗んだ疚しさの棘は心に刺さったままだった。

聖戦を信じ切っていた早紀は、学校の二階のホールに日毎増えて行く出征兵士の遺影の前で、軍歌や予科練の歌を口ずさむ、一寸おしゃまで孤独な三年生だった。

文学青年の夢を捨てられない父健三は仕事も長続きせず、母の苦勞の種だったが、軍需工場に

勤めるようになって収入が安定し、母は、内職で始めた傘の骨の繋ぎ（番傘や蛇の目傘の頭の部分に、頑丈な糸で傘の骨を繋ぎ入れてゆく作業）をしながら啄木の歌や小学唱歌を口ずさむ（機嫌な日々が続く、時には自分の育った頃の話を懐かしそうに話してくれた。母の第三吉が体調を崩して中学へ行けず、長い入院生活の中で、啄木にのめり込み、母が口ずさむ啄木の歌は三吉叔父の受け売りだった。母の小学生時代や、女学校生活、早紀の知らない母の青春が息づく話を、明子の守や内職の手伝いをしながら聞くのが大好きだった四年生の頃の早紀。

夜になると父の若い友人が集まり、文学論や時事論に花を咲かせることもあり「もう寝なさい」と母に急かされても、「もう少し、ね！もう少しだけ」と言いながら、半分も理解できない話に、もつともらしい顔で聞き入っていた。

父の所へ顔を出していた青年二人に召集令状が来て、挨拶に訪れた一人が「早紀を嫁さんにしたかったのに」と早紀の頭を撫でながら帰っていた。ほんの冗談だったのに、なんだか大人になったような気がして、学校で慰問文を書く宛名は何時も久一様だった。

父の本棚から「宮本武蔵」をこっそり持ち出し灯火管制の始まった部屋で布団に潜り込み懐中電灯の明かりで全巻読み通したのもこの頃だった。五年生の早紀には読めない字が多く難解すぎたが、判らない字を飛ばしながら読み進み、武蔵・又八・お通と又八のお婆などが繰り広げる人生ドラマは臚な輪郭ながらも頭に残ったようだった。

五・六年生になると、毎日が勤労奉仕。道端を開墾して豆を蒔き、運動場も半分は開墾して芋や

野菜の畑になり、農繁期には出征兵士の留守宅へお手伝いに出かけた。刈り取った稲の束や田植用の苗を運ぶ位しか役に立たなかったが、「苦勞さん」という感謝の言葉と共に出る白米の握り飯が嬉しく、一生懸命働いた。

校舎の一部が兵舎になり、狭い校庭で高等科の男子生徒が毎日のように厳しい教練を受け、日本各地で空襲被害が広がり、大人の中では危惧する声が囁かれていたが、ラジオから流れる大本営発表を信じ切っている早紀は、日本の勝利を少しも疑っていないかった。

岐阜にも警戒警報が鳴り響き、空襲警報に代わることが頻繁に起こり始め、そのたびに防空頭巾をかぶって、不気味なサイレンに怯えながら避難するのが日課のようになっていたが、敵機の通り道になつて居るらしく何時も岐阜は空襲を免れていた。

昭和二十年七月九日午後九時過ぎ、警戒警報のサイレンに飛び起きた早紀は、何時もの様に、早紀の役目になって居た貴重品袋を右肩から左へ斜めに括り付け、外へ飛び出した。空襲警報に代わると、隣の小父さん達が、大きな納屋の屋根に上って「今日も他所の空襲だよ。早紀ちゃんも見るかい？」と誘う。高所恐怖症の早紀だったが「ワ―綺麗だ」「まるで花火のようだ」と口々に叫ぶ大人たちの誘惑に負け、震える足を踏みしめながら梯子を上った。

それは、初めて目にした怖くて美しい光景だった。斜めに落ちてゆく光の列、それが焼夷弾と知りながら、思わず「わ―綺麗」と叫んでしまった早紀だった。やがて警戒解除のサイレンが鳴り、「やれやれ一安心」と貴重品袋をタンスに仕舞い蒲団に潜り込んだ。

その時、まるで機関車が近くを通り過ぎるような轟音と共に「どーん」と地響きがして、天地が揺れた。それは岐阜駅に落とされた一発の爆弾だった。追いかけるようにいきなり空襲警報が鳴り渡りテンヤワンヤの大騒ぎになった。何時もの大切な役目も忘れ外へ飛び出した早紀の眼に映ったのは、赤々と燃え広がる空襲の焰の空だった。早紀の家の屋根にも焼夷弾の袋が落ちて火を噴いていた。

庭の大きな柿の木をしようと登った兄が自分の履物を手に「今畜生！今畜生！」と叫びながら火を叩いて消そうとしていた。「健作！危ないから下りなさい！」母に促されて下りた兄に「これを運んで！」と大きな布団袋が渡され「こんなに重いもの持てるか！」と叫んだ兄は、柿の木の根元に包みを放り出して逃げてしまった。明子を負った母は大きな籐の乳母車に色々積込んでいた。今にも天井が落ちてくる気がして上ばかり見ながら怖々家の三和土に入った早紀は、蚊帳の包みが二個積まれたのを確認すると「まだ積むものがある！」という母の叫び声を後ろに乳母車を曳き出していた。名古屋で二度も焼け出され、早紀の家に疎開していた父方の祖父の「蚊帳が一番大切だ」という口癖が脳裏にこびりついていたのだ。

「火事の時には風上に逃げる」とお題目のように唱えながら走り出した。隣家の納屋の傍の竹藪に火がつきポンポン爆ぜながら勢いよく燃え始めている。とにかく大通りまで出る決心をした早紀は、火の海の竹藪の脇を一目散に駆け抜けた。それからは無我夢中で走り、気が付けば川沿いの大通りを何処へ行く当てもないままひたすら走り続けていた。

その時上空に不気味な爆音が聞こえ、向こうから走ってきた在郷軍人らしき人が「伏せ！」と号令を発した。いつも学校で教わっている通り、両手で耳と顔を保護して伏せた早紀のすぐ脇すれすれを機銃掃射の弾丸の列が土煙を挙げて走り抜けた。早紀の我慢もそこまでだった「お母ちゃん」と大声で泣きながら乳母車も放り出して戻り出した。

早紀が走り抜けて来た火の海の藪はまだ煙り続けていたが、向かいの農家は、高い生垣が類焼を防いで無傷で残っていた。その防空壕から「早紀ここだよ！」という母の声が聞こえ、誰かに引っ張られ防空壕へ。

広い庭の銀杏の太木の下に造られた大きな防空壕の中は避難して来た近所の人たちで満杯だった。何とか仲間に入れてもらい、兄健作の顔も見えて嬉しかったが、明子を背負った母は和子や祖父や父の身を案じて涙を流し通しだった。「ドン！」ものすごい音がして壕が揺れた。それっきり静まり返った気配の中、全員息をひそめ慄き乍ら警報解除のサイレンを待った。

警報解除がこれ程嬉しかったのは初めてだと思いつつ、外へ出た人々は思わず息を飲んでしまった。防空壕のすぐ傍に不発の巨大な焼夷爆弾がゴロンと転がっていたのだ。銀杏の太木で信管が壊れたと思われるが、もし爆発していたら、と考えただけで鳥肌が立ち、震える声でお礼を言いながら逃げるようにその場を離れた。

早紀の家と隣家は見事に焼け落ちていた。現金と貯金通帳まで焼失した早紀の家に残ったのは、早紀が持ち出し、幸いにも道端で無事撤収された乳母車一台分の我楽多だけだった。人間はとっさ

の場合頭が働かなくなってしまうらしく、母の積み込んだものは端切れの風呂敷包みや半端の残り毛糸などで、蚊帳二張りが最高の品物だった。

丸裸になってしまったが「裏の家の人たちと田んぼの中に潜んでいた」と和子が泥にまみれて泣きながら現れた時は皆抱き合って嬉し涙を流してしまった。名古屋の祖父を避難させた桑畑に、焼夷爆弾が落ち、被っていた布団と共に飛ばされて胸を打った父は、家が焼け落ちるのを悔し涙で眺めていたと言うが、一家七人誰も欠けることなく大厄を乗り越えた安堵で少しだけ幸せだった。

母は、父や祖父を探しに行った畑で肥溜めに落ち足を挫いてしまったとて、青竹の杖に縋って歩く姿が痛々しかった。兎に角後片付けを始めようと気合を入れてまだ煙り続けている焼け跡に手を付け始めた。

そこへ叔父三吉が「親父が駄目だったらしい」と真つ青な顔を引きつらせてやって来た。絶句した母は痛い足を引きずりながら叔父と一緒に出かけて行った。

若いころから苦勞を重ね、大勢の職人を使う機織り業を起こし一代で成功を収めた風雲児で、頑固だった祖父留吉への思いに押し潰されそうな胸を抱え、皆黙々と片付け作業を続けて居た。

岐阜市の七十パーセントが焼失したこの空襲で中心市街は焼け野原になり、母加代の実家もすっかり焼け落ちていた。

城下町加納の一角の広大な敷地に建っていた工場を含めた大きな家は、操業を止めた広い空間が怖くて早紀はあまり好きでなかった。祖父と同じように裸一貫から財を成した母の従兄が、地下室の様に畳を敷き、電気も引いた大きな防空壕を

作り、すっかり惚れ込んだ留吉は中心市街にある甥っ子の防空壕迄毎晩出かけて居たのだと言う。

その防空壕の入口付近に直撃弾が落ち、熱風が吹き込む様になっても「逃げたらいかんぞ！この中に入れば安心じゃ」と頑固に言い張って、命から逃げだした人は火傷をしても助かったのに、留吉と近所から避難していた多数の人が蒸し焼きになってしまった。

皮肉にもその家の母屋は焼け残り、田舎だからと預かっていた従兄の娘さんの大切な嫁入りの支度一切が早紀の家と共に灰燼に帰ってしまったのだ。

(続く)

暫くお休みだった田島早苗さんの連載が始まりました。

「それを知る者は伝えねばならない。同じ時空で同じ体験をしても、そこに百人の人が居れば、百の真実がある。」

愚かな第二次大戦の私の記憶は、母の背に負わられてのもので、残像として残っているものはない。終戦から七一年しか過ぎていないというのに、国のリーダーと呼ぶべき者達には歴史を逆行しようとする姿勢すら見える。

それを知る者は、語らねばならない。

例え万人の者が同じことを証言し、聞き飽きたと言われても、体験者にはその事実を語ることの使命を忘れてはならない。

田島さんの物語としての自分史に大いに期待すると同時に拍手を送りたい。

《読者投稿》

私の国府巡り「神や仏」 京都府精華町 今井 直

最近、自分は無宗教だと言う人が多い。ある若者と話していると、家には仏壇も神棚もないらしい。「何も信仰していません。無神論者です。天は自ら助くる者を助く」と、ヒネた返事が返ってきた。だが正月には神社に詣で、結婚式はキリスト教の教会で挙げ、子どもが生まれると宮参りや七五三、そして葬式は仏教に頼ることになる。彼岸の墓参りや法事も欠かさないから、宗教や神仏を否定しているわけではない。一方でクリスチャンでもないのに、クリスマスやバレンタイン・ハロウィンなどがすつかり、我々の生活のなかにとけ込んでいる。欧米人には、このような日本人の宗教観は理解し難いだろう。

神代の昔より我々の祖先は、農耕や漁労を通じて大自然と関わりあって生活を営んできた。自然の力は人に大きな恵みを与えてくれるが、時には猛威をふるうこともある。人々はそんな自然現象に神の存在を感知し、山や岩・海・木・滝・風など森羅万象に神が宿るとされ、祀りの場には社を建ててきた。社会的に傑出し敬慕された人も死ぬと神様、鯛の頭も信心からいわれる「八百万の神々」だ。「トイレの神様」までいるという。数年前、植村花菜の歌が大ヒットしたが、「それはそれはキレイな女神様」だそう。神道は他の宗教と異なり、創始者や教祖がおらず、聖書やコーランのような経典も存在しない日本固有の信仰である。六世紀半ばに仏教が伝来し、崇仏派の蘇我氏と外来の宗教を排除しようとする物部氏が対立したが、蘇我氏が勝利した。神道は多神教だから、仏

様も one of them (神の仲間入り) という考えが選ばれたのである。とかく日本人は、敵対するよりはおおらかで柔軟な傾向がある。仏教を受け入れた背景には、大陸の優れた文化や思想、仏像・寺院建築にみられる先進の技術にも、為政者が着目したのは想像に難くない。やがて神道と仏教は、調和をはかりつつ浸透し、深く融合していくにつれて、日本人の思想や文化・生活に大きな変革をもたらした。

神仏習合が進み、奈良時代にはたいの仏教寺院が守護神を祀るようになった。仏教伽藍を造営するとき、その土地に宿る神とトラブルを起こさぬよう、地主神よりもパワーのある神を新たに勧請して祀ったのである。天平勝宝元年(749)に東大寺は大仏殿建立にあたり、豊前国から宇佐八幡神を勧請して東大寺の鎮守とした。宇佐八幡宮の分社はこの時が最初だった。現在、法華堂(三月堂)の隣に位置する手向山八幡宮だ。なお、八幡神の東大寺境内へ遷宮の入口門は、その名も転害門(てがいもん)。天平の昔のまま現存する国宝建築だ。

他にも、空海が高野山に建立した金剛峯寺は丹生都比売(にゅうつひめ)神社を、東寺は伏見稻荷大社を守護神にした。最澄は延暦寺を建立したとき、比叡山の地主神である日吉大社を守護神として崇敬している。興福寺と春日大社ともに藤原氏の氏寺・氏神で、神仏習合が進むにつれて一体のものとなった。春日大社の祭神は武甕槌命(タケミカヅチノミコト)で、常陸の鹿島神宮からお迎えした時、白鹿に乗ってきたと由緒にある。今も奈良公園に鹿が多いのは、鹿が神の使いとして手厚い保護を受けてきたからだ。なぜ鹿島神宮だったのか？

それは藤原氏の始祖である中臣氏が、鹿島神宮の神祀官を代々務めていたからという。藤原宇合がゆかりの深い常陸国に国守として派遣されたのも頷ける。

明治維新までわが国は、浄土真宗を除いて神仏習合が一般的で、神道と仏教を区別しない場合が多かった。江戸時代には、中国の古典を研究する儒学が中心だったが、一方で記紀・万葉などを研究し、日本人固有の精神を明らかにしようとする国学が起った。『古事記伝』を著した本居宣長が学問的に国学を大成し、あとを受け継いだ平田篤胤は、仏教や儒教という外来思想によって日本古来の純粋な精神が穢され歪められたと説いた。この天皇を中心とする国粹思想は、幕末の尊王攘夷・倒幕運動に大きな影響を与えた。

明治新政府の政治理念は、平田篤胤が唱えた「復古神道」がベースとなった。つまり神道は儒教や仏教の影響を受ける以前の姿に戻すべきだと、「神仏分離令」を布告したのである。当初は仏教排斥を意図したものではなかったが、結果として「廃仏毀釈」により仏教施設の破壊だけでなく、貴重な文化財が数えきれないほど消滅してしまっ

た。明治維新は祭政一致の制度を復活させ、神社が国家の管理下に置かれたが、先の大戦後、GHQにより国家神道が解体されるまでは、神道にとつてあやふやな時代だったと云える。五箇条の御誓文は天皇が神に誓う形式をとったのだが、その内容に宗教性は見つからない。大日本帝国憲法で信教の自由が明記された際、「神道には教義が存在しないから宗教ではない。いや、朝日に祈願し夕日に感謝する心そのものが宗教だ」と大論争になった。

神宮・大社・神社の違いにも明確な基準がない。

かつて「神宮」といえば「お伊勢さん」を指したが、明治天皇を祀る明治神宮が創建されると、天皇を祀るのを神宮、皇族を祀るのは宮と、順次昇格する神社が出てきた。「大社」も元々は「出雲大社」だけだったが、終戦後は政教分離により国家や皇室が直接関与しなくなったため、大社と名乗る神社が多くなった。現在の「春日大社」も明治初年から「官幣大社春日神社」だったが、昭和二十一年（1946）社格制度の廃止に伴い、全国に約千社あると云われる他の春日神社との混同を避けるため改称された。因みに、出雲大社は通称「いづもたいしや」だが、正式名称は「いづものおおやしる」。出雲では陰暦十月は神無月ではなく神在月（かみありつき）と呼ぶ。全国から八百万の神々が神議のために出雲に集まるからだろう。

お伊勢さんからおよそ十五歳の多気郡明和町に、齋宮跡（国史跡）がある。一昨年「祈る皇女 齋王のみやこ 齋宮」として、文化庁の日本遺産に認定された。天皇の即位ごとに名代として天照大神に仕えるため、都から神宮に派遣された未婚の皇女が齋王。その齋王が暮らす所が齋宮で、約百二十以上の四方の区画が基盤の目状に、東西に七列・南北に四列並ぶ大規模な史跡だ。齋王が神宮に赴くのは、九月の神嘗祭、六月と十二月の月次祭の年三回。普段は齋宮で祈りを捧げる慎ましやかな生活の一方で、歌を詠むなど都のような雅な暮らしだったようだ。齋宮寮と呼ばれる役所を中心に、総勢五百人以上の官人が齋宮で執務をしていたという。齋宮跡の発掘調査で、緑釉陶器や墨書土器・祭祀用具などは出土するが、礎石は一つも見つかっていない。これまで約四千棟の建物跡が確認され

ているが、そのほとんどが掘立柱建物だった。また瓦も出土しない。礎石建てや屋根を瓦で葺くのは仏教寺院の建築技法であり、神道では忌み言葉だった。平安末期の史料では、桧皮葺きと茅葺きとある。神仏習合の世になろうとも、神国日本の発祥の地・伊勢では仏教はタブーだったのだ。

お伊勢さんは内宮・外宮とも正宮は、神明造と呼ばれる日本古来の建築様式だ。高床式の建物は、桧の丸柱を地面に掘った穴に直に建て、切妻の屋根は萱葺き。その姿はオーラが感じられ神域にふさわしく美しい。（余談だが、両国技館の土俵の上の吊り屋根も神明造で、お伊勢さんの御神木で造られているそうだ）一面に白い玉石が敷き詰められているが、塗装しない白木の掘立柱は、風雨に晒されると朽ちやすく耐用年数が短い。そこで二十年ごとに式年遷宮が行われる。建築技術の伝承と、氏子の信仰心を喚起する意味もあるのだろう。平成二十五年に第六十二回目の遷宮が行われたばかりで、まだ木の香も新しく清々しい。

齋王を伊勢に遣わす制度は、南北朝時代に兵乱により廃絶するまで約六百六十年間続き、その間六十人余りの齋王が齋宮に赴いた。最初の齋王は大来皇女（大伯皇女とも書く）で、伊勢国に下向したとき十二歳だった。天武天皇が壬申の乱の戦勝祈願のお礼参りとして、娘である大来皇女を神宮に奉仕させたという。十四年後、朱鳥元年（686）九月九日に天武天皇が崩御。その直後の二十四日夜更けに、同母弟の大津皇子が飛鳥から密かに姉君に会いにやって来た。父が没して十五日目、忌中のことである。国家の守護神である神宮に勝手に参詣するのは禁忌であり、皇位継承者の一人で

ある大津皇子はそれを犯した。それだけで謀反と受け取られても致し方ない。弟は神宮の加護を頂こうとしたのか、それとも唯一信頼できる姉君に今生の別れを告げに来たのか……二十六日未明、弟は独り大和へ帰って行った。姉君はただ弟の無事を祈るしかない。

ふたり行けど 行き過ぎかたき 秋山を
いかにか君が ひとり越ゆらむ

（万葉・巻二一〇六 大伯皇女）

（二人して歩いて行っても越えにくい秋の山道なのに、今頃弟はどんな思いでただ一人越えて行くのだろうか）

果たして十月三日、大津皇子は謀反人として死を賜った。大来皇女が齋王の任を解かれて大和に帰って来たのは、一カ月半後の十一月十七日。最愛の弟：朗らかなその姿はどこにもなかった。

神風の 伊勢の国にも あらましを

なにしか来けむ 君もあらなくに

（万葉・巻二一六三 大伯皇女）

（神の国の伊勢にいた方が良かった。なんで大和に帰って来たのだろう、この世にもう弟はいないというのに）

大来・大津の姉弟が通った道は、飛鳥と伊勢を結ぶ初瀬街道である。壬申の乱の際、彼らの父も出陣し凱旋した街道だ。隠駅家（なばりのうまや）（三重県名張市）はその中ほどに位置し、交通の要衝として知られる。改新の詔で五畿七道が定められた時、「畿内とは、東は名叡（名張）の横河（名張川）よりこちら」とあり、大和国と伊賀国の境目だった。名張川ほとりの夏見地区に、小ぢんまりした寺院跡がある。金堂・講堂・三重塔の基壇と礎石が残る夏見廃寺（国史跡）だ。七世紀末頃に建立されたと推定されている。大来皇女が天武天皇の菩提を弔うために発願したと伝わる。そうではなく、実

は愛する弟・大津皇子を偲ぶ小伽藍だという説もある。夏見廃寺に関する文献が少なく詳細は不明だ。多感な少女時代に斎王として天照大神に仕えた大来皇女が、果たして「瓦屋根」を建てるだろうか？と大きな疑問も残る。謎が多いぶんだけ、想像力や夢をふくらませてくれるのだ。

また廃寺跡からは埴仏（せんぶつ）の破片が大量に出土した。埴仏は仏像を半肉彫りした雌型に粘土を詰めて型を取る（片面の「たい焼き」のようなもの）、型抜きした粘土板を低温で焼き上げ、表面に漆を接着剤として金箔を貼って仕上げたタイルである。古代寺院ではお堂の中は仏の世界であり、無数の金色に輝く埴仏を壁に貼り付けて美しく飾ることがあった。廃寺跡の一角に「夏見廃寺展示館」があり、目の覚めるような埴仏が復元展示されている。沙羅双樹の前で弟子達に説法する阿弥陀如来を表した一辺が約五十二センチの大型のもの、両脇に菩薩を配置する如来像や小さな独尊像など…玄奘三蔵がインドから持ち帰り中国を経由して渡来したというから、ガンダーラ美術風だ。今や3Dプリンターもあるご時世だが、高度な技術を誇る日本の職人技には驚かされる。すべて手作業で細部に至るまで精緻な技を駆使し、四日市の工芸会社が実物大で復元した。五種類の埴仏七〇九個を貼り付けて縦二メートル八十センチ・横二メートル十センチの黄金の壁を作り上げた。これは必見！

大来皇女は万葉集に六首の歌を残した。すべて弟を思いやる歌だ。以後ずっと歴史は、姉君について口を閉ざす。ただ『続日本紀』の大宝元年（701）十二月二十七日の条に、「大伯内親王薨。天武天皇之皇女也」とだけ伝える。薨年四十一歳。大津皇子を死に追いやった持統天皇が崩御したの

は、大来皇女が生涯を閉じた翌年であった。

* 斎宮歴史博物館・夏見廃寺展示館の学芸員やガドの方々から情報や資料を頂戴しました。

やさと暮らし（2）

徒然里女

・ミモザ：

Kさん宅を訪問・・・今まで気が付かなかったが、大きなミモザの樹。電線に届くほどの高さ、幹もかなり太い、ミモザって、こんなに大きくなるんだ。イタリアでは、春にミモザの日があつて、男性から女性へ日頃の感謝を込めて、ミモザの花束を贈る・・・？町中が黄色く美しい花で溢れかえるという！K宅のミモザは道端で、通行人がカメラを向ける・・・？我が家も、満開のミモザを夢想して、4本植えたが3本が枯れてしまう。それでも、残った1本が、たくさんの蕾を膨らませている。満開になるのが楽しみ・・・！

・現場監督：

連日の寒波、身を切るような寒さと強風の中、レンタルスペース「楽市楽座」の作業は続く。S氏は屋根の上・・・夫は病院での定期診察日、午後遅くに合流？テラスの屋根設置の真最中！薄暗くなり始めた頃、屋根の波板設置完了。この屋根の下に洗い場と、男女のトイレが設置される。高所の作業は、見ている方もハラハラドキドキ・・・？この春オープン♪レンタルスペース楽市楽座♪目指して、作業は続いていく・・・！

・日がな一日：

週一のレストラン日、強張っていた体に、うつすらと汗が・・・窓からは太陽が射し、そのぬくもりでエアコンもオフに・・・。やすみ時間のよもやま話、いろいろな情報が飛び交い、アツという間の2時間。22年前に起きた阪神淡路大震災、職場（当時は川崎の病院勤務）の仲間が救援に…報告会での話は、あまりにも壮絶、みんなと救援金集めに駆け回った。夕方、色々と思い出し乍らのコロちゃん散歩、今日も筑波山に沈む夕日はうつくしい・・・！

・お喋りエコクラフト会？：

昨年から始める、やる気満々のメンバー3人…。メンバーのHさんは、福島からの被災者、山崎に来るまで5回も引越した。今年の3月で、避難解除される地域もあるが、黒い袋（放射能土）を山の様に積んであるところには帰りたくない。八郷に被災者が居れば、その方たちとお話をしたいと・・・？

・ランチコンサート：

雪が無い、辺りが白くなり始める中「カフェオリーブ」へ…。今日は、毎月開催される、ランチコンサートの日。雪が降り、こんなに寒い中でも、既にお客さんが…。懐かしの歌謡曲で始まったコンサートは盛り上がる。バンドは、ジャズ、ボサノバ、歌謡曲の演奏を次々と…！演奏者もお客も年齢が高く、親近感がわく…。

用事があり途中退席したが、常連さんと演奏者から、また来月に…の声がかかり、嬉しかった。

・今日も鍋…

囲炉裏の上で、シユシユと音がして鉄瓶が沸騰。その後、囲炉裏に鍋をかけ、出汁を存分に…。その間に冷蔵庫を除き、野菜や余りものを確かめる。週3回の鍋、名前などはない。有り合わせの食材で、継ぎ足しを…。不思議に飽きがこない(夫がどう思っているか?)。今日も、残り出汁で朝の味噌汁、昼のうどん、そして夜のお鍋に…。カレーまで、出汁と残野菜を利用、大変美味しい。それにしても作り過ぎでは?昭和57年の今日は、学校給食全国一斉「カレーデー」…?

・こんこん流・帯留展…

こんこんギャラリーの企画は…八郷に拘わる作家20人による帯留展。帯留、帯締め、羽織紐…小さな作品に込められた思いが感じられる。素材も色々(陶、硝子、木、漆、金属等)絵付けも素晴らしい、何時も乍ら感心!当番の方3人が着物姿で、日替わり人形の着付けをしていた…!

・横綱誕生…

稀勢の里関、横綱昇進おめでとございます!(茨城県では3人目とか?)私が子供の頃、村人の楽しみは相撲だった。近くにある八幡様の境内(隣地区)部原の公民館には土俵が作られ、相撲大会では大人も子供も大賑わい。その頃、大人たちが筑波出身の横綱男女ノ川(みなのがわ)の話をしていた?調べると、第34代横綱(つくば市磯部出身、昭和12~17年68歳没)。男女川(水無川)は利根川水系で筑波山に源を発し、南流して桜川に合流する川。つくば山神社の御神酒に、「男女ノ川」というお酒も…。百人一首にも歌われている「筑波嶺の 峰より落つ

る 男女ノ川 恋ぞつもりて 淵となりける」

・油断…

先日、天気が良く風も無かったので、布団を外に…たつぷりと陽の光を浴び膨らんだ布団、暖か気持ち良い…ところが、突然の激しい咳、鼻水と鼻づまり、苦しくて一睡もできない? 朝も起きれない、二日間白湯だけで過ごす? 若い時からのアレルギー体質でパッチテストも全てに反応!減感作療法を数年間…主治医から、出来の悪い体質と言われた。此処数年症状が出ず油断が…布団干しが悔やまれる?

・お通夜…

突然の訃報…。友人のつれあいが、入院して僅か数日で逝ってしまう。その友人に会うのは辛い…それでも、お悔やみに行かねば。葬祭場で一緒にあった他の友人と、話しをして、これからは、気を紛らわせるためにも、どんどん…誘い出そう、と言う話になった。Aさん頑張れ…!

・美味しいお見舞い…

高橋さん(ひつじの郷が、リンゴの甘露煮を持つて…。先週、訪ねてくれた時、具合が悪くてお話も出来なかった? 高橋さんは「なぐんだ、まだ食えねえのが…」これなら、食べれるぞ…!と、リンゴの甘露煮をぶら下げて、見舞いに…。リンゴの甘露煮は、甘酸っぱく、美味しく、気持ちも嬉しく…!

・エコクラフトの日…

被災地、福島から引越しを5回…やっと八郷に落ちくHさん。我が家でのエコクラフトの仲間、

前から同じ経験をした方と話がしたい…。八郷に住む被災者を紹介した、年齢は親子程違うが、住居等々共通の話題も沢山…話が弾み、気が付くと、太陽は筑波山の陰に沈んでいた。間も無く6年、福島をはじめとした被災者の苦しみは、少しも解決していない。むしろ、不安は募るばかり…今日、クラフト籠づくり休めて、おはなしの会に…。暖かくなったら、山の中腹にある彼の家辺りの散策を約束して…。

・復活…

体調が回復、夫の代わりに朝のコロちゃん散歩、そして夕方コロちゃん散歩の復活。久々に外を歩くと、田圃では田起し、柿畑では剪定…農家は早くも始動している。散歩コースでは、梅の花が甘い香りが漂わせ、豊後荘病院の紅梅が満開、暫し花見を楽しんだ。外出時にはマスクを、家の中では空気清浄器二台をフル稼働…この時期を何とか乗り越えよう?

・節分…

今日も囲炉裏には、赤々とした炭火が…!この火を上手く使い煮豆つくりを…鍋の豆(大角豆)に、たつぷりの水を注ぎ、コトコトコトコトと…途中味見をしながら、今日も美味しく出来ました。!!!ダイアモンド筑波までは、まだ数日かかりそう…?節分の今日は母の誕生日、母を想いだし乍ら…オニハソト・フクハウチ…

・ジオパーク…

ひまわりの館で開催された講演会に参加してきた。協働のまちづくり委員会主催で「筑波山地域

ジオパークの魅力」についての内容だった。昨年9月、全国で41番目認定された「筑波山地域ジオパーク」。最近よく耳にしていた「ジオパーク」だが、よく解らない。今回の講演で、ジオパークについて解り易く説明を受け、古代から続く営みの不思議さを感じた。会場は、たくさん参加者で、関心の高さを感じた。此の素晴らしい遺産の上で生活している実感と関心をもち、もつともつと知りたいと思う。

・コロちゃん…

夫が、新刊本「あした会えるさ」(今泉文彦著・茨城新聞社発行)を手に入れた。むかし(昭和年代)石岡駅で、帰らぬ主人を13年間待ち続けた犬が…これは、実際に有ったお話です。タロー(皆からつけられた)の駅通いが10年を過ぎた頃、多くのメディアが紹介。「…1日も欠ける事なく、朝夕2回石岡駅で、人の群れを…」「いつの間にか人々は「タロー」と呼ぶように、その「タロー」が待つ人は誰か?」17年ものあいだ…。某新聞の企画で、駅に通い続ける「タロー」を紹介。その記事を読んだ家庭で騒動が…石岡市内に通う5歳の幼稚園児が愛犬とはぐれる。この少女をタローはずっと待っていた。…な、なんと、飼われていた当時の犬の名前は「コロ」少女と家族に可愛がられていた。我が家の老犬コロと重なり思わず涙が…。

・ウオルドルフ人形…

つくば市在住の義妹は人形作家…。《しあわせなお人形たち展》への誘いがあり、筑波銀行本店ギヤラリーへいつてきた。ウオルドルフ人形は、羊毛文化のヨーロッパ(ドイツ)から生まれた。人形

の芯に、羊毛が詰まった人形で、シットリ手触りが良く温かみがあり、汚れたら洗い破れたら縫い合わせ…。長く付き合える自然素材で作られた人形です。子供に持たせたい人形として、ロコミで筑波を中心に全国に広がっている。義妹はいくつかの教室で講師をしており、今回は生徒さん達による作品展…。どの作品も優しく思わず抱きたくなるような出来…。

・狸の置物…

「…狸の置物が欲しい?」川崎勤務時代の先輩から電話が「玄関先のタヌちゃんにお友達が欲しい…!」笠間へ行き、6、7店覗いたが、何処も陶雛人形ばかり、もう少し前だったら…?折角笠間まで来たので、日動美術館(昭和時代の洋画を覗く。そして気になっていた、高橋協子さんの個展も見てきた。協子さんの陶雛人形が可愛らしかったので、撮影を…。

・雪化粧…

窓から眺めるとチラチラだった雪が、いつの間にか一面真っ白に変わっている。今日は、久しぶりに「いしおか育ち」へ顔見せにと…。この予期せぬ大雪に、怖気を出し中止にした。この辺りでも結構な降雪、水戸では12cmも積もっている?TV中継で、偕楽園の雪景色、咲き始めた梅に積もる雪に風情が…。懐かしい友人から、ニュースを見たとき…心配して電話が、久しぶりにお喋りができ、嬉しさが…。

・たぬきの置物…

数日前から「たぬき」を探している…。先日は

笠間、今日は益子へ…道は分っていたのに、ナビの案内で峠越えをさせられ、しかも宇都宮まで連れていかれる…。それでも、冠雪の日光連山が美しく楽しめた。《狸の置物》と言えば信楽焼だが、益子にも沢山ある。知らなかったが色々な狸が、持っている物や姿が違い、オスメスまで、多種多様…! 多くあり過ぎるので依頼主に写真を…相手も出先、SMSでは写真が届かず、決める事は出来ない…。近いうちに一緒に探そうと…?簡単に請け負ったが、中々大変だった。

・花粉と粃殻が…

毎年、この時期の大きな悩み…昨日も冷たい北西の風が、乾燥しきった空に舞うのは、杉や檜の花粉と隣の柿畑から飛んでくる粃殻です。柿の肥料にと大量に蒔かれている粃殻が、渦巻いて庭の彼方此方に積もって仕舞うのです。それだけでなく、玄関の中や窓のサッシの中にも紛れて来ます。花粉症のイライラともみ殻のイライラ、風が吹くたびに、ダブルのイライラは暫く続きそう…。

・暗い箱の中でごめんなさい…

朝早くからゴルフの夫…片付けのチャンス。八郷に越して来て20年、そのままになっていた段ボールの箱を開ける(バンドラの箱か?)と、目的の物が出てきた。夫は昔(労音時代)海外の演奏家招聘のため、よく海外に行っていた。ソ連のバレエ団(モスクワ音楽劇場バレエ団)や多くの民族歌舞団の招聘交渉で、毎年数回…。

お土産は、マトリョーシカが多かった。ながいあいだ、明るい所に出ることもなく、しかも異国で…? 暗い箱の中でごめんなさい? やつと、飾

ることが出来ました…！

・バレンタインデー…

ストレッチから帰ってくると、夫が小包を見せて、長男のお嫁さんからチョコレートが…と、嬉しそうだった。田舎で、自然の中で山や森や空、に感動しながら暮していると、都会の事など忘れていた…むかしの仲間から、都会の様子が話される、特設売り場が設けられ賑やかだとか。因みに、日本のバレンタインデー（女性から男性へチョコレートを…の発祥は、蒲田にある《メリーチョコレート》が仕掛けたもの、日本生まれの文化だとか…。

養生日記

堀江実穂

・いたずら虫

私の体の中には、たくさんの「いたずら虫」が住んでいる。

耳鳴りを起こす虫。

人がみんな動物に見えてしまう蜻蛉のような目。体中の血液をドロドロに変えてしまい、血管をボロボロにしよう虫。

コレステロールの数値をドンドン上げていく虫。肝臓には、お酒を飲むと暴れ出してしよう虫。足には体重を支え切れないひ弱な虫がいる。

私の大切な体にいろんな虫が棲みついて悪さをする。でも、そんないたずら虫も私の一部。これからも付き合っていかなければならない。明るく笑って振る舞うしかない。

・宝石

本心に皆、輝いているよ。

一人一人、一生懸命生きている。

君は知的障害者と言われる。

あなたは身体障害者と呼ばれている。

私は精神障害者と呼ばれる。

でも障害者は、本当は障害者ではない。

特異な才能の持ち主なのだ。

天才、…そう、天才なのです。

天才とは、誰もが持つことが出来ない才能のこと。

人は皆、自分と違うものを避けようとする。

差別しようとする。

人とうまくコミュニケーションがとれないだけ。

私の個性。

人とうまくコミュニケーションがとれないだけ。いや、それも間違い。

自分を大事に生きようとする、邪魔扱いをされるだけ。

どんな自分でも、地球にたった一つしかない宝石なのだ。

自分の宝石を大切に、輝きを失わないように優しく磨こう。



《風の呟き》

感動の詩（うた）

菅原茂美

2016年・読売俳壇「年間最優秀賞」

○次の世は 君をかすめる 赤とんぼ

東京都 徳山麻希子

私は文学には、とんと疎い。だが世の中には、こんな意味深の詩（うた）を詠む人もいるのかと、大きな感動を受けた。失恋物語は文学や歌壇にはつきものらしい。この句は、虚構なのか、或いは失恋の実体験なのか。いずれにしろ、強く人の心を打つ。私は後者と見たい。

今生で、好きな君とは結ばれず、次の世でこそ結ばれたい…と、せめて今は赤とんぼになって、君の傍をかすめ飛び、肩にでも触れてみたい…。なんとも可憐で控えめな慕情ではないか。ついっられて目が潤む。ピンカラ兄弟「女のみち」の宮史郎（自ら作詞。あのダミ声ながら、控えめで切ない女心を唄い、空前の大ヒット（420万枚となった。

*

もう一つの詩は、私の心を揺さぶる「鏡五郎」の演歌「いでゆの宿」の一節に

○障子の影の虫の音は 私の胸の忍び泣き…

なんとという名文句であろうか。女心をこんなにも繊細な感覚で詠う作詞家には、ノーベル文学賞でも与えたい。日本人の肌理（きめ）細かい言い回し。鈴虫などが、障子の影で遠慮がちに鳴いている。それは女心の忍び泣き…。控えめで、可憐な思いを実に見事にとらえている（だからと言ってアクテイブな女性をけなしているのではない。誤解なきよう）。

騒々しかった蟬しぐれも終わり、物静かな秋の夜長に、障子の影でチロロチロロと虫が鳴く。好

きな男に胸の内を訴える事もできない。女心に切なく燃える赤い灯。虫に託して切々と訴える。一度抱かれりや、女は弱い……ともいう。

しかし多分この詩は不倫の情歌？ 女心の訴えを読もうともせず、ただ若い女性をもてあそぶ……としたらそれは絶対に許せない。或いは逆に甲斐性なしの哀れな男が、恐妻を逃れて、物言わぬ女性に心を寄せる。同情した純情娘は、ついつい引きずり込まれて……。形容矛盾だが、どちらとも言える。

私共には歳頃の孫達がいるので、失恋やストーリーなどが心配でならぬ。なにしろ2腹5人は全て姫。28歳は結婚して、ひ孫も誕生。じい・ばあとして8分の1の宝物。24歳と21歳は共に医学生なので、自己責任で人生を切り開け。19歳と17歳はなんとも危なっかしいが、しっかり人格と知性を磨き、この世に生まれた喜びを満喫せよ。不幸は、自分の心がけ次第で、どちらにでも展開する。

稀勢の里は『天才には努力で勝つ』と、中学卒業文集に記したという。天賦の才能に胡坐をかく天才などには絶対に負けるな！ 愚直なまでの真っ向勝負。だからこそ、多くの人に感動を与え得る。

さて杞憂かもしれないが、AI（人工頭脳）が掃除機や自動翻訳機などに実用化され、自動運転の自動車も間もなく実用見込み。そして小説さえAIで書けそうだし、チェス、将棋、囲碁まで、世界最高実力者に勝てるようになった。これが微妙な表現の和歌や俳句までAIに占領されるようになったら、牧歌的感動はどこへやら。それはいかんぜよ。

常陸丸のこと

打田昇三

平和国家を標榜する日本国民として戦争を肯定する意図は無いが、歴史的事実なので内容を其の俚に書いている。不適切な表現が有れば御寛容を頂きたく、最初にお願いしておく。

「稀勢の里」の活躍と横綱昇進で茨城県内が湧き返っているけれども本来、茨城県は大相撲と密接な関係にあった……と言うよりも、現代では余り知られていないが、大相撲の近代化は明治時代に茨城県出身の力士によって成し遂げられたのであると思う。百科辞典には「常陸山谷右衛門」と言う名力士のことが記載されている。此の人は水戸出身の横綱（第九代）で両国国技館の建設と大相撲の近代化に貢献したとされる。

常陸山は、稀勢の里と同じ年頃（中学三年）の時に当時の出羽の海部屋に入門して、明治三十六年（一九〇三）六月には富山県出身の二代目・梅ヶ谷と共に横綱免許を得た。ラジオもテレビも無い時代だが、常陸山と梅ヶ谷という両横綱の対戦が全国的な熱狂を呼び、其れが大相撲常設館として両国・国技館の建設に繋がったと言われる。

話は変わって、常陸山が横綱になる数年前に長崎の造船所では六千トンを超える大型貨客船が建造された。当時は世界に誇示できる造船能力を日本が持つており、其の技術を結集して造られた此の船は「常陸丸」と命名された。勝手な推測だが当時、破竹の勢いで勝ち進んでいた大相撲期待の星・常陸山にあやか……って命名されたのだと思う。

大型船を建造する目的は大量輸送である。日本は島国であるから仕方は無いが、明治中期から昭和二十年八月迄に大日本帝国を経営していた連中

は日本列島と言う自分の土俵を使わずに表現は悪いが「他人の俵（ふんどし）で相撲をとる」様な感覚で大陸や太平洋地域、南方諸島などでの戦争だけを考えていたらしい。都合の悪いことは何でも神頼みで済ませられると錯覚していた。

明治三十七年二月六日、前後の事情は不明だが、大日本帝国は大国ロシアに対し最後通告をしたが其の三日後に、朝鮮半島仁川港外に居たロシアの軍艦二隻を撃沈してから翌日に宣戦布告をした。日露戦争と言っても主な戦場は中国大陸と朝鮮半島であるから日本軍は現地に行く。大型輸送船の常陸丸も軍の御用船としてフル稼働で兵員や武器弾薬・食糧・軍需品などの輸送に従事していた。

明治三十七年六月十四日、常陸丸は軍の基地に指定されていた広島・宇品港から何度目かの輸送業務で大陸に向けて出港した。船員は百二十人居たが船長及び機関長、一等運転士はイギリス人である。日本の船員は大型船に習熟して居なかったのである。乗船客は戦場に向かう千九百十六人の軍人と三百余頭の馬であるが、馬も希望はしないのに「軍馬」として強制連行されたのである。軍人は「近衛後備連隊」で連隊長は須知源次郎中佐である。通常ならば戦地に行く部隊ではない。日本軍は余程の兵力不足だったらしい。

当日の海は平穏であつたが空は曇っている上に濃霧が立ち込めて周囲の展望が効かない。常陸丸が関門海峡を抜け白島を左舷に見て響灘に入った頃に砲声が聞こえた。日本から其れ程も離れて居ない海上であるから、誰もが日本艦隊の演習であろうと思ひ込んでいたのだが、実は是がロシアの軍艦クロンボイとリュウリックに依つて常陸丸の僚船である和泉丸が砲撃撃沈される音だった。

先に言って置くと、日本海を挟んで向こう側の大陸に在るロシアと戦うのであるから海上が戦場になり、船舶輸送が兵站の大動脈になることは小学生でも分かるのに明治天皇以下、当時の軍部は元より政治家、国会議員、官僚など誰も「輸送安全の対策」を講じて置かなかったことになる。

常陸丸の一同が何かを考える暇も無く、和泉丸を沈めたロシア艦二隻が接近して来た。護衛の艦船も無く輸送船には武器が無い。船長以下が選ぶ方法は逃げるしかないのだが大型輸送船と戦艦とでは速度が違う。ロシア艦は卑怯にも停止信号を出すと同時に砲撃をして来た。常陸丸は貫通した砲弾で機関部を破壊されて動けなくなった。

続く砲撃で被弾数は五、六十発に達したらしい。是により乗船していた多くの兵が倒れたが二百名程の兵は海中に飛び込んだ。其れに対してロシア艦が接近して射撃を行った為に乗船者の多くが犠牲になったのである。連隊長・須知中佐は敵の砲撃が続く中で生存者を集め最後の別れを述べた。既に多くの者が死亡している。連隊旗が船上で焼かれ何名かの将校は割腹自殺を遂げた。

船長は英国人ながら船と運命を共にしたけれども、海中に飛び込んだ者のうち五十三名は偶然に浮いて来た大型ボートに取り付いて漂流中に六月十六日早朝、敵艦から逃れた佐渡丸に救助され、其れによって常陸丸の最後が明らかになった。

日本海海戦で東郷元帥がロシア艦隊を壊滅させるのは翌年の五月である。此の時に一隻だけ逃がれた巡洋艦が今でもサンクトペテルブルグ港(旧レニングラード)に停泊している。日露戦争(日本海海戦)の敗戦を忘れない為と言われるが、常陸丸の事件など誰も忘れている日本とは大違いである。どち

らが良いのか：答えは難しい。

風と戯れて

・春を待つ

あと少し もうすぐ春が来る。

「寒風も 暫しの我慢 梅香る」

木下明男



・散歩道

まだ寒い

「散歩道

歩いていると彼方此方に春の兆し。

荒地地の隙間 いぬふぐり」



・夕陽の筑波山

暖かくなった それでも陽が落ちると寒い。

「陽が落ちて 浅春のひとしほ 筑波山」



【特別企画】

打田昇三の私本・平家物語

巻第六・(一・一)

このシリーズの「巻第四・二の前文」で専門の先生が平家物語の英雄として三人の名を挙げられたことを紹介した。最初の平清盛は当然だが二人目選ばれたのが、平家一門では無くて源氏の本曾義仲である。平家には人物が居なかったのか：と言うと、そうでは無くて平家は平清盛が一代で築き上げたものが大き過ぎて身内が護り切れず(後継者の平重盛が早逝したこともあって)一門が右往左往しているうちに滅ぼされてしまったから英雄として活躍する暇が無かったのである。

平清盛は天皇家が独占継承していた朝鮮半島型の

支配構造を自分流に展開して頂点に登ったから「強ければ皇族を凌駕する（超える）道がある」ことを世間に示してしまった。それを真似て理屈抜きで実践したのが木曾義仲であるが、天皇家が抛り所とした儒教の国・朝鮮半島の論理だと嘘でも筋目が重要になることを知らなかった。田舎育ちで小難しい制約を無視した木曾義仲は「強ければ良いのだ!」とばかりに平家方の軍勢を打ち破り京の都を支配したけれども、頼れる親戚が熊か猪ぐらいしか居なかったから、出自とか家柄とか民主主義の現代ならば虚飾に過ぎないものが何よりも重視された時代には「お上品さ」が不可欠な京都の中央政界に向かない存在となってしまう。

木曾義仲は専横を極めた平家を京都から追い出すという功績を上げながら、海千山千の後白河法皇や古狸のような公家に翻弄され、利用された挙げ句に源氏同族ではあるが嫉妬深くて自尊心の強い源頼朝に消されてしまうのである。源頼朝は頂天に登った訳だが中途半端な知識があったから「都に居ては思う様に動けず、また危険である」と知って鎌倉から遠隔操作で権力を駆使した。

気の毒なと言うか、忘れ去られていた木曾義仲が一般に知られる様になったのは戦国時代の後半である。東海地方の弱小豪族・松平家の嗣子であった竹千代少年こと徳川家康が今川氏の人質に出されていた頃の話になる。近江の国司であった佐々木高頼という人物が石山寺に参詣した帰りに琵琶湖の南岸に広がる粟津の松原で粗末な墓標を見つけた。「木曾義仲の墓」であると言う。

佐々木氏は宇多天皇の血を引く名族であり清和源氏との関わりも深い。そこで高頼は自ら一寺を建立し「義仲寺（ぎちゅうじ）」と名付けて菩提を弔ったの

である。江戸時代に俳聖・芭蕉が久しく此の地に留まり、死後は義仲の眠る墳墓の傍らに埋葬されている。「木曾殿と背中合（あ）わする夜寒哉」…又玄（いうげん）という俳人の句がある。

平家物語の英雄として主役の平清盛に次ぐ扱いを受けながら「墓」らしいものが長期間無かったというのは「はかない」話であるが、国文学の専門家から「平清盛に次ぐ平家物語の主役」と認められたのであるから「以て瞑すべき」であろう。

平家物語では今回から始まる「巻第六」と次の「巻第七」にかけて気の毒な木曾義仲に関わる話も出て来るけれども、先ずは木曾義仲とは内容が違うが是も気の毒な「高倉上皇」が亡くなって其の追悼記事が続く、また源頼朝の出現で心中が穏やかならぬ平清盛も、どうしても良い様な場面で意地を見せてから波瀾万丈の生涯を閉じる。平清盛には知られたいが皮肉なことに「平家物語」は清盛の死から面白くなっていくようである。

新院崩御（しんいんほうぎよ）のこと

原文は「治承五年正月一日の日…」から始まるが、この年は七月から養和元年と年号が変わっている。そして二月四日には平清盛が六十四歳で此の世を去ってしまう。其の二十日ばかり前には表題にあるように「新院」こと高倉上皇が、父親の後白河法皇と義父の平清盛に氣を使いながら二十歳を過ぎたばかりで帰らぬ人となった。朝廷や平家にとっては良い年では無かったのである。

大筋を振り返ると、前年の治承四年には清盛の圧力で高倉天皇が三歳の息子（平家の血を引く安徳天皇）に

皇位を譲らされ、以仁王（高倉天皇の異母兄）が諸国の源氏に平家追討の令旨を配り、源三位頼政が平家打倒の兵を挙げて失敗し、清盛が京都を捨てて福原神戸に都を移し、有力寺院の僧兵が平家に反旗を翻して内戦が有り、関東では源頼朝が伊豆で兵を挙げて負けたけれども再起して、都から遙々と是を討ちに來た平家の大軍は何もせず富士山だけ見て逃げ帰った。

その頃、訳有って木曾の山中で在地の豪族に育てられていた源氏の遺児（頼朝の従兄弟）義仲が以仁王の誘いに応じて兵を挙げ、北陸方面から京都に向けて進撃を開始した。頼朝は鎌倉に居て地盤固めをしており、その許には東国の武士団が続々と集まっていたのである。その様な東国の状況を知ってか知らずか、平家は近辺の有力寺院に巢食う僧兵軍団と四つに組んだ戦いを展開していて遂に奈良の都を焼き払う暴挙に出た。緊迫した世情に対応する平家政権が無謀無策な上に此の年は農作物が不作で餓死する者が多かった。朝廷も無力無能で何を考えているのか分からない…という実に素晴らしい時代であった。国家としては最低の時代であるが、見捨てる訳にもいかないので以下、原文に従って話を進めることにする。

新年であるから内裏では「伝統」の美名に隠れた形式的な年頭行事が行われるのだが、東国での源氏の挙兵と政府軍（実は平家軍）の大敗、奈良の火災（平家軍の暴挙）などによつて大極殿で天皇が高級官僚らの拝賀を受ける儀式などが中止となった。従つて天皇が顔も見せないし、音楽も鳴らず吉野の国栖（くす）吉野川上流地方の住民が年賀に來て献上品を出すことを慣例としていたのも来なかったから献上品も貰えない。悪口を言わせて貰えば国家の象徴である天皇

が「クズ」の献上品を当てにしているようではお終いである。

藤原系の公家連中は自分たちの故郷である奈良を焼かれた恨みから、平家屋敷にも宮殿にも誰一人として挨拶に来なかった。一月二日に予定されていた宮中（清涼殿）での催し（宴会）も中止となり、下級職員たちは皆が声を顰（ひそ）めていたから宮殿内はお通夜のように暗い雰囲気になっており（平家の所為で）仏法・王法が尽きることは何とも浅ましいことである。

此の様子をご覧になった後白河法皇は「私は前世に於いて十善の行を収めた（善き行いをした果報）によって天皇の位に就くことが出来た―実際には悪運が強かっただけであるが―支えて来た四代の天皇（三条、六条、高倉、安德）は子であり孫である。今、此の様な状況になって、重要な天皇の政務が正しく行われないう事態なのに平家の為に遠ざけられて虚しく日を送らねばならない。悲しいことである」と嘆かれた。

正月五日、僧兵が平家軍に抵抗したことの罪を問われて僧侶の取り締まりに任ずる高僧たちが免職となり全ての権限を奪われた。奈良の僧たちは老人も未成年者も平家軍の為に或いは射殺され、或いは斬られ、或いは猛火に焼かれて命を落としていた。僅かに逃れた者は山林に姿を隠したりして寺の多い奈良に僧侶の姿が見られなかった。

興福寺の別当（最高位の僧侶）は合戦の際に多くの仏像や経文が焼かれるのを見て其のショックから倒れて程なく死んでしまった。此の僧は（原本に名を挙げられていないが誤りが有るらしいので名を省略する）情け深いお方であつた。或る時に郭公（ほととぎす）の鳴く声を聞いて歌を詠んだ。

「聴くたびに珍しければほととぎす」

何時も初音の心地こそすれ

―その事から初音の僧正と呼ばれていた人物である。そうした状況下で誰が言い出したか、正月八日から十四日まで宮中の大極殿が清涼殿で行われる国家安全祈願のための法要・御齋会は欠かせないというので実施されることになり、行事の責任者を公家たちが選ぶことになった。奈良の高僧は合戦騒動で処罰を受けている。止むを得ないので比叡山の僧を選ぶしかないところ、奈良が本場の三論宗（西暦六五五年に高麗の僧・惠灌が伝えた）の学僧で後に東大寺に入った藤原氏系の成法已講（じようほういこう）が京都山科の真言宗勧修寺（かんじゅじ＝醍醐天皇創建の寺）に難を避けていることが分かったので、此の人を呼び出して予定どおりに法要を済ませた。

その頃、高倉上皇が体調を崩した。原本に「御脳つかせ給ひて」とあるが脳の病（精神病）では無い。現代的に言えば、生まれつき健康ではなかったのに、あれこれと心労が重なり生きる気力を無くしたのかも知れない。無責任な言い方をすれば「平清盛と後白河法皇に殺された？」―失礼

上皇は、父親の後白河法皇が義父の平清盛によって鳥羽殿に押し込められたり、兄である以仁王が平家に討たれたり、都が福原に遷らされたり、源氏が東国で勢力を得て天下争乱の兆しが見えたり、自分の責任では無いが好ましくならぬ事態が続いている事に心を悩ませられていた。それが原因で病床に伏せることが多くなり「病いは氣から」遂に回復の見込みもなくなったところに、追い討ちをかける様に東大寺と興福寺が平家に焼かれたと聞かされたので、いよいよ危篤状態になった。主治医から報告を受けた後白河法皇のショックは大きく、ただ嘆くばかりであつたが、当時の名医は病気が治せなくても死亡

時期は的確に言い当てるようで正月の十四日には六波羅殿と呼ばれた平頼盛の屋敷にて亡くなられた。

高倉上皇は治世十二年、古書に書かれた仁義の道が廃れゆく世を嘆かれつつも善政を布かれたのだが、如何なる神通力を持つ神仏も人間の死を免れる術は無かったのである。御遺体は、其の夜に京都東山の麓（清水寺の東面）の清閑寺に移され荼毘に付された。此の寺院には高倉天皇の甥に当たる六条天皇の墓所もある。其の日、平治の乱で殺害された藤原信西の子で比叡山の高僧であつた澄憲法印が上皇の葬儀に向かったのだが間に合わずに茶毘の煙を見て「つねに見し君が御幸を今朝問えば帰らぬ旅と聞くぞ悲しき」と詠んだ。

そして名は知られて居ない女房の歌も伝わる。

「雲の上に行く末遠く見し月の光消えぬと聞くぞ悲しき」

―上皇の行年は二十一歳、内に十戒を保ち外には仁・義・礼・智・信を護って礼義を正しくされていた末代に伝うべき賢王で有られたから世の人々が日月の光りを失ったように惜しみ悲しんだ。この様に願いは叶わず、果報も十分では無い人の世は何とは儚（はかな）いものであろうか。

平家物語は此の悲しい章段の後に高倉上皇の追悼記事が続いてから、入道（平清盛死去に及ぶ。もはや平家の家運も、古い例えだが「♪上野菰の夜行列車」）のように下り一方なのである。

紅葉（こうよう）のこと

平家が信仰した厳島神社辺りの名物が「紅葉饅頭」なので、その話題かと思うのは平家物語の作者を冒

流することになるが、此の話は緊迫した状況の中で無くても良いような章段である。

高倉上皇が亡くなった養和元年（一一八一）は一年しか無い年号であり、話の内容も饅頭ではなくて前章段を受けて亡き上皇の思い出話になる。

上皇の命日が一月十四日で、其の後の閏月（うるうつき＝旧暦で余分に置かれた月）四日に平清盛が他界するのだが、大物の死であるからは別枠「入道死去」で語られていて、その前に木曾義仲の挙兵が先の無い清盛に報告される。是も清盛の寿命を縮めた。平家側から見れば大親分の病氣に加えて、鎌倉に源頼朝、木曾に義仲が居て、以仁王の令旨（平家打倒）を配って歩いた新宮十郎行家も中部地方で敵対している。東国は敵だらけなのである。失礼を承知で言え「平家物語」も亡くなった天皇の思い出話を長々と述べる状況では無いほど平家に危機が迫っているのだが…。

本文に戻ると…国民が慈悲深い天皇であるとしているのは「延喜・天曆の治（えんぎ・てんりやくのち）」と称される第六十代の醍醐天皇と六十二代の村上天皇であるが、亡くなられた高倉天皇は此の両帝に勝る天皇であると人々が噂した。通常の場合は「天皇が名君である」と称され国民に仁徳を施されるのは成人された後のことであるが、此の君（高倉上皇）は全く幼少の頃から優しい性格であられた。即位されたのは八歳であるが、十歳ぐらいの頃に紅葉に興味を持たれ、内裏の北に在る門の近くに小山を築かせ、其処に紅葉する楓、櫨などの木々を植えさせて「紅葉の山」と名付けられた。（單なる贅沢にも思えるが）

其の場所を一日中、ご覧になって、なお飽きずに居られたけれども或る夜に野分秋から冬にかけて吹く激しい風・台風かも知れない）が吹き荒れて紅葉を散らして

しまった。辺りは落葉で埋まっている。これを見た宮内庁の下級役人たちが、是を「ゴミの山」と認識して（誰でもそうであるが）直ちに清掃作業を開始し、一か所に集めた。

其の日は風が冷たい朝だったので集めた落葉や枝で焚き火をした。その際に誰が言い出したのか公務員の感覚では許されない行為だが規律が弛（たる）んでいた宮中のこと、其の火で酒を暖めて飲んだ。紅葉山も下役もすつきりしたのだが、その後で天皇が「紅葉山を視察する」と言い出した。

側近の者が下見に来たところ辺りは綺麗に掃き清められていて紅葉の葉は一枚も無く、酒で顔を紅葉のようにした職員が居るだけであつた。驚いて担当者に聞くと「実はこれこれ…」と答える。

側近は「何と言うことをしたのだ。お上が大切にしておられる紅葉を其の様にゴミ扱いをした罪は深い。お前たちは直ぐにでも牢に入れられ、悪くすれば流罪にされるであろう。その為に私も責任を取られる…」と嘆いているところへ、天皇が普段の日よりも早起きをして紅葉を見に来た。

天皇が見ても神様がいても、無いものは無いので「是はどうしたことだ！」と側近に尋ねた。

側近は他に説明のしようが無く、事実を申し上げるしかない。すると天皇は、機嫌良く笑顔を見せて「唐時代の詩人・白楽天の詩に『林間酒を暖めて紅葉を焼く』というのがある。役人たちに其の詩の心を誰が教えたのであろうか。風流なことをしたものよ！」感心され、側近が心配したような罪を問われる事も無く済んだ。

また、安元の頃（反平家の陰謀が漏れる少し前の頃、高倉天皇は「方違（かたがたがえ＝外出先が占いで凶に当たった際の避難場所）」で宿泊された際に宮中でも時刻を知らせ

る役人が叫ぶ声で目が覚めて眠れないのに慣れない宿で其の夜は特に寒さが厳しく少しも眠ることが出来なかった。その時に高倉天皇は、善い政治が行われたとされる第六十代の醍醐天皇のことを思い出された。醍醐天皇の治世は息子の村上天皇の治世と共に「延喜・天曆（えんぎ・てんりやくのち）」と称賛されている天神様こと菅原道真が登用された時代である。醍醐天皇は「国民は、さぞ寒かろう…」と衣類を一枚、脱いで就寝されたという逸話を残すのだが、高倉天皇は其の事を思い出されて（其の様な事の出来ない）自分の徳の至らなさを恥じられた…というのが此の章段で作者が言いたかったことであろうけれども、素人芝居と違つて主役が着物一枚を脱いでも、どうなるものではない。

その夜更けに、遠くで誰かが叫ぶ声が天皇の座所にまで聞こえた。供の者たちも是を聞き付けたけれども、高倉天皇は側近を呼び寄せ「あの叫びは何事であるか、確かめて参れ」と命じられた。

命を受けた公家は寒いので自分で行かず、警護の武士らに命じて現場へ行かせた。念のために複数の者が声のした方向に走って行くと、少し先の十字路に下働きの者と思われる娘が衣装箱の蓋だけを持つて屈（かが）みこんで泣いていた。事情を聴くと、後白河法皇の御所に仕えることになった女房付きの者であり、出来上がった衣装を届けに来て数人の盗賊に襲われたと言う。泣きながら娘が言うには、主の女房は実家が裕福では無く親類も少ない中でやっと作った衣装であるから、是を盗られてしまつては主の御奉公が叶わなくなる…と言う。武士らは取り敢えず、此の娘を連れ帰り有りの俣を報告した。

報告を受けた天皇は「気の毒なことである。如何なる者の仕業か！堯（ぎょう＝古代中国の理想の天子）の

民は天子の心を自分の心として正しい行いをした。
 今の代の民は天皇である自分の心をもって心とする
 故に、罪を犯す者がいるのであろうか。是は悲しく
 も天皇の恥である」と嘆かれて、被害に遭った娘
 に「盗られた衣装は何色か」を尋ねられた。娘がお
 答えると高倉天皇は外出先であるから、携帯電話
 か何かで宮中に居た中宮（皇后）の建礼門院（清盛の娘・
 徳子に「この様な色の衣装は有るか？」と聞かれた。
 宮中であるから衣装は山ほど在る筈で、中宮が「御
 座います」と答える。「では、それを届けて下さい」
 ということで、娘が盗られたものより遙かに上等な
 衣装が真夜中にも関わらず宅急便で送られて来た。
 天皇は、其れを娘に与え「夜は危険だから明る
 くなってから届けなさい」と労（いたわ）られて、翌
 日の朝に、警護の者を付けて法皇の御所に居る女房
 の許まで行かせたのである。このことを聞いた者は
 誰もが高倉天皇の徳を称え、心優しい君主の千秋万
 歳を祈ったのである。此の章段は是で終わるのだが、
 話が出来過ぎてゐるから事実では無いと思われるが、
 高倉上皇への讃歌は続く。
 （続く）

編集事務局 〒315・0001

石岡市石岡13979・2

TEL 0299・24・2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

ふるさと風の会文庫

「打田昇三の私本・将門記」近日発売！

ふるさと風の会の打田昇三が、歴史の里石岡における必読書「平家物語」に次いで、「将門記」の現代訳を完成させました。常陸国の府中(石岡)の歴史を語るうえで、平将門が何故府中に攻め入ったかを知ること
 は、極めて重要なことです。その経緯が記された「将門記」は、読解が難しく、あまり読まれることはあ
 りません。ふる里にとって重大な書である「将門記」が、打田昇三の私本として完全現代語訳されました。
 近日発売予定ですので、是非手にしてお読みいただきたいと思います。

主な風の会文庫

- 打田昇三の私本・平家物語（全4巻） ○打田昇三全集全6巻 ○歴史の嘘「虚構と真実の谷間」（上下）
- 打田昇三の私本・将門記
- 兼平智恵子の石岡散歩 ○ふるさと風のことは
- ふるさと七十二侯に一行の吟いて七十二相（文：白井啓治 絵：兼平智恵子）
- 伊東弓子 一行詩「風の景」
- 小林幸枝 風に舞う（1・2）
- 菅原茂美「遥かなる旅路」（1・11）
- 白井啓治「朗読舞詩集・寒蟬」：「霞ヶ浦の紅い鯨」：「皇帝ペンギンの首飾り」：「随筆・風にふかれて」
 「朗読・ふるさと物語」（1・11）
- 木村進 「地域に眠る埋もれた歴史シリーズ」全24巻：「石岡地方のふるさと昔話」
 「茨城のちょっと面白い昔話」

※風の会文庫は、石岡市街角情報センター、新鮮野菜の石岡そだちにて販売しております。